
Tales Of The Abyss ~ Another story ~

じーく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Tales Of The Abyss
Another story

【Nコード】

N7030U

【作者名】

じーく

【あらすじ】

Another story 第二弾です。

基本的に原作通りに物語が進行します。結構大まかですがwオリジナルキャラはいますが、あくまで原作通り、ルーク、ティアが主人公。旨く表現できないかもですが、温かい目で見守ってください。

#0 始まりを告げる声（前書き）

『ここは…… いたい……俺は…… 誰……だ？』

男は何も思い出せなかった。そう自分の名前以外……
それは生まれた意味を見つける……思い出す……そして知る。

そんなもう1つの物語……The Abyss。

#0 始まりを告げる声

男は何も思い出せない……

唯感じるのは、目の前に広がる無限の闇……

「ここは……どこだ……？ 俺は……いたい……」

何を考えても分からない……

永遠に続くのか……そう思っていると……

《アル……我が……えるか》

それは闇の中で確かに聞いた。

「だ……誰だ……？」

闇に向かい叫んだ。

《我が名は……主の名は、アル……》

途切れ途切れだが……自分の名だろうか？それは聞いた。

「名前が……俺の名はアル……」

名前を聞いてもやはり自分のことを思い出せない……

《まだ…覚醒…では…無い…か…》

再び声が聞えてきた。

《我が…よ… 力の…一部を…授け…》

《生きぬいて… 世界…オールドランド……覚醒…》

またもや途切れ途切れで内容の意味がよく分からない…

「何なんだ？分かる様に言ってくれ！」

俺は闇の中で叫び続けた。

《…目覚めよ！》

次の瞬間…あたりが光で包まれた。

声の主はいつたい…

そして、俺は何者なのか…

そして、俺の意識は光の中へ消えていった。

#0 始まりを告げる声（後書き）

よろしくお願いします！

さて…声の主は誰なのか…

これからどうなっていくのか…

それは………

分かりません… 苦笑

アビスが3DSで出たんで…

を思い切って出してみました。

温かい目をお願いしますね！

ロザリオと並行して考えてた小説

#1 鉾山の町アクセリユス（前書き）

よろしく願いします!!

#1 鉾山の町アクセリユス

…

……

……

そこは見慣れぬ一室のベッドの上。

まだ 意識がハッキリしないが……

どうやらオレはベッドで寝かされているようだ。

「……ここは？」

上半身を起こし辺りを見渡した。

やはりまったく身のに覚えの無い場所……

ここはいつたい……

「あ……お兄ちゃんおきたみたいだね！」

！！

突然の声に驚いて、

声がした方を見ると、

「お兄ちゃんだいじょうぶ？ちょっとまってね。ママたちよんでくる！」

歳は5〜7歳だろうか、

女の子がいた。

「えっと…君は？」

「ママー！！パパー！お兄ちゃんおきたよー！！」

質問をしたと同時に、女の子は両親呼びに言った。

「……えっと…」

女の子の顔を見てもやっぱり身に覚えが無い…

それどころか、自分自身が何者かも分からない。

「…オレは…いつたい………」

自問自答していると、女の子の両親だと思える人たちが来た。

「大丈夫かな??」

おそらく父親だろう。

オレの方を見て話しかけた。

「あ……あの… こ…ここは？オレはいつたい…」

「ここは 鉾山の町アクゼリユスだよ。君は町のはずれで倒れていたんだ。」

場所を説明してもらい、自分がどうしてここにいるのかも

一通り教えてもらった。

「そうだったんですか… どうもありがとうございます。」

なぜ倒れていたのかは分からないが、

命の恩人にはかわりないは為、

お礼を言い立ち上がろうとした。

「くっ……」

「あ！ムリをしちゃダメよ？あなたは5日間も眠っていたんだから。まずは安静になさい。はい、食事を持ってきたわよ。」

倒れそうになるオレを支え、その上食事まで用意してくれていた。

「本当に何から何まですみません…」

見知らぬ他人であるオレに……

最後の方は口に出来なかった。

「ふふふ、困った時はお互い様。さあまずは体を元に戻しなさいな。サラ！お兄ちゃんの看病をよろしくね。」

「はあーい！」

女の子はすぐ側までやってきて、

ベッドの側のイスに座った。

「お兄ちゃん！わたしがかんびょうしてあげるから！はやくげんきになってね！」

満面の笑みでオレを見つめた。

「ありがとう…」

声を搾り出すように、

自分の今の気持ちを搾り出すように、

今の思いを伝えた。

オレがこの世界に目覚めて最初の1日はこのように始まったのだった。

#1 鉱山の町アクセリユス（後書き）

アビス3DS！いまやってますね！

なつかしー！

おもしろーい！

久しぶりに楽しめそうなゲームでした！！

ありがとうございます！

#2 戻らない記憶（前書き）

よろしくお願いします!!

やーっぱりアビス面白いですね

9月の新作も必ずかいまーす!!

#2 戻らない記憶

オレは、家の近くに有る高台へ来て空を眺めていた。

オレがこの家に来て数週間たち…

体の方は特に問題なく回復したが……

「……やっぱり何も思い出せないな……」

記憶……

それのみがいつまでたっても戻らなかった。

「やあ おはようアル。どうしたんだい？こんなところで」

そこに恩人であるガーランドが高台に来た。

「ああ、ガーランドさん… いや特に理由は無いですよ。ただ空を見ていただけです……」

そついうと少し表情を暗くし、

再び空を見上げた。

「そうか…」

そう言うとガーランドはアルのそばまで来た。

「隣…良いかな？」

アルのすぐ横に立ち聞いた。

「ええ かまいませんよ。」

そう言うと二人並んで座った。

「記憶… まだ戻らないようだね。」

暫く無言だったが

空を見ながらガーランドは静かに話した。

「……ええ」

「君がたまにとてもつらそうな表情かおを見ると、サラから聞いてね。心配していたんだ。」

空を見ていたが、

言い終わると同時にアルのほうを向いた。

「私の友人にも記憶障害を持ったものがいてな、何か…すごいショックを受けて発祥したらしいんだ。根気いいケアと彼の故郷に連れ

て行ったことで何とか回復してな…それも約2年もかかったんだ。
君が不安なのはわかるよ。あの時の奴を見ているようだからな・
・大丈夫だ。記憶障害は何かのきっかけで起こるもの、いつか必ず無くした心の鍵が見つかり分かるようになるさ。」

いつもの陽気な表情じゃなく、

真剣な表情だった。

「ガーランドさん… 本当にオレはあなた方にお世話になりっぱなしですね…どうもありがとうございます。」

何度目だろうか？

本当に心優しき家族なのだ……

いくらお礼を言っても足りないくらいだった。

「ハハハ！礼は良いって、私も君には感謝しているんだ。いつも鉦山の仕事であまり娘にかまってやれていなかったからな。特にここ数年はいろいろと問題があつてさらに輪をかけて相手に出来なかった… 君のおかげでサラは大分元気になったよ。どうもありがとうな。」

そう言つて手を差し出した。

そして2人は握手を交わした。

「あー！やーっとみつけたっ！」

暫く2人で話していると…

下から声が聞えた。

「おい。パパ！アルおにちゃん！ あさごはんのじかんだよ！」

声の主はサラだった。

「おー！わかった！」

「はやくきてねー！」

そう言つと家の方へ走つていった。

食事の手伝いの最中だったのだろう。

「さ！行こうか。」

そう言つてガーランドは立ち上がった。

「あの…ガーランドさん。」

一緒に立ち上がり話しかけた。

「ん？なにかな？」

「オレに何か手伝える事は無いですか？体の方は何とか回復しましたし、このまま何もせずにお世話に成りっぱなしというのも悪いので…」

「そうだな…… 力仕事は他にもあるが…… 人数は揃ってる…… うむ……」

暫く腕を組みながら考えた。

「よし。なら私達が留守の間は私の娘の勉強相手になってくれないか？家庭教師ということかどうか？」

ピント人差し指を突き上げて答えた。

「えええ！ オレ役に立てるかどうか…… それにこの世界についてもよく思い出せないし……」

「ハハ！ いいじゃないか、娘とともに勉強してくれ！ 君が勉強する姿を見せればきっと娘も真似をする。娘は君の事がお気に入りだからな。今の君の知識も広がるし娘も勉強する…… 一石二鳥じゃないか。」

笑いながら答えた。

「後、もし鉱山の仕事で手を借りたくなったらすぐに貸してくれ！……これでどうかな？」

ウインクしながらアルを見た。

「……わかりました！ よろしくお願いします！」

「ああ！じゃ まず朝飯だな。早くせんとレイとサラに怒られる。」

「あはは　そうですね。」

そう言い自宅へと帰っていった。

#2 戻らない記憶（後書き）

ありがとうございました！！

#3 秘密の場所（前書き）

ティルズおもしろーい！そして最新作も買っぞー！
♪

でも やっぱリアビス
♪

文は駄文なんできとーに付き合ってください！

#3 秘密の場所

サラとの勉強会を実施して数週間・・・

様々な事を学べた。

この世界は・・・・・・・・

オールドランドと呼ばれるものらしい。

どこかで聞いたことのある名前だった。

オレが・・・初めて心に響いた言葉だった。

ガーランドさんに頼まれた通り、

オレはガーランドさんの娘・サラと共に、家庭教師とは言えないが・
・

共に勉強をした。

この世界・・・

この世界を包み込むように存在する音譜帯・・・

6大音素　そして最近発見されたと言われる第七音素・・・

それぞれには固有の属性を持つらしい。

中でも7番目の音素・ローレイについては存在は公式にはその存在は確認されていないらしい。

歴史上、接触に成功したのはユリア・ジュエのみであるらしいのだ・・・

覚えるのは大変だ。　勉強の難しさが改めて分かる。

しかし・・・

「知識が増える事はとても楽しい事だったんだな・・・」

つい声に出してしまった。

サラはまだ幼い。

世界の成立ちや情勢について学ぶのはあまりにも早い事だった。

基本的な幼少期に学ぶ教本を一通り共に勉強していたのだが、

その中で、世界のことについて記載されている本が見つかったのだ
った。

ガーランドさんに聞いても知らない本だと言っていた。

おそらくこのアクゼリウスへ立ち寄った学者が誰かが落としたもの
らしい。

ここまで、綿密に記載されている教本など見たことが無いからだそ
うだ。

「おにいちゃん すっーごい たのしそうなおしてる！」

サラが俺の顔を覗き込みながら話しかけてきた。

「ははは・・・そうかい？ うん 楽しいんだ。オレのことは何も
思い出せないけど・・・ いろんなことが知れて・・・ それに
サラ、君と一緒に遊んだり勉強したりするのも凄く楽しい。過去の
事より今って思えたからね。」

そう微笑みかけながら、サラの頭を撫でてあげた。

「えへへへ」

サラは撫でられるのが嬉しいのか、

目を細めてニコニコしながら笑っていた。

「わたしも おにいちゃんがんばりになってくれてうれしい！ そーだ！ おにいちゃん おべんきょうもおわったし おそとにあそびにいこう！ わたしのひみつのばしょ、おしえてあげる！」

サラはそう答えた。

「へえー秘密の場所？」

「うん！ みんなにはないしょなんだ！！おともだちにもまだおしえてないよ！さきに おにいちゃんにおしえようとおもって！！！」

サラはそう言うといすからピョンつととびおり、

アルの腕をつかんだ。

「いこう！」

「ああ、分かった。よろしく頼むよサラ。」

その後、サラの母親・レイさんに一言いいに行く。

「あまり 危ないことしちゃダメよ？ アルもしっかり見ておいてね。」

「任せて下さい」「はい！」

鉦山は子供が遊ぶには危険がある場所だ。

あまり 娘に危ない事をしてもらいたくないのは親なら当然の事だ。だが、父親の仕事の関係で鉱山の町と言うあまりに寂しい場所に生まなくてはならない状況は親に責任がある。

サラは、基本的には凄く寂しがり屋なのだ・・・

だが大変よくできた子でもある。

その事を決して顔には出さないようにしているのだ。

だからこそ、父親が帰ってきた時はコレでもかというほど、甘えている。

しかし、それも中々難しくなっていた。

鉱山の中から障気と呼ばれる原因不明の人体に悪影響を及ぼす気体が微量ながら出てきたらしいのだ。

故に作業は困難を極め そして時間もかなりかかるようになっていく。

人員に被害が出ないようにする為だ。

そして、家族との時間も激減した。

サラもその事を実感していた・・・

そんな時、サラは倒れているアルを見つけたのだ。

とても親しくしてくれ、一人っ子であるサラが「おにいちゃん」と呼べる人に出会えたのだ。

そして サラは日に日に元気になっていった。

決して顔には出さないようにしていたが、

親には分かる。

それが嬉しくて仕方が無い。

そして、アルと言う男の子（18歳くらい？）

数週間共に生活をしていて信頼できる人だと言う事も分かった。

この子にならサラを任せれる・・・

「いつてらっしゃーい あまり遅くならないでねー！」

「「「いつてきますー！」」」

そして家を出た。

#3 秘密の場所（後書き）

ありがとうございました！ちょっとペースをあげたいですね・・・
投稿の・・・

アビスはゆっくりプレイしてます♪

面白いです！！

#4 大切な思い出（前書き）

よろしく願います！

こっちの方も頑張って投稿します！

#4 大切な思い出

町を暫く歩き、鉾山の入り口まで来た。

「サラ・・・ その秘密の場所って大丈夫なのかい？ あぶない場所じゃないのかい？」

レイさんにサラの事をまかされている以上、

あまり無茶な事はできない。

少し心配になり聞いてみた。

「だいじょうぶだよ。おにいちゃん！すぐそこに みちがあるでしょ？ちよつととおりにくいけど。ここなんだ！」

そう言つてサラは坑道にはいる手前の所に指をさした。

「こつち！とおりにくいからからきをつけてね。」

四つんばいになりながら、穴の中へ入っていく。

結構長い道だった。20〜30mはあるだろうか。

それを超えると広い場所に着いた。

「ふう、今度は広い場所に着いたね。　ここがそうかい？」

「ちがうよー　ほらこんどはあっち、　ひかりがみえるところ！」

サラが今度指をさしたところは　少し傾斜になつてゐる道で、奥を見ると光が見えた。

外に繋がっているのだろうか・・・

「よし！サラ！ちょっと疲れただろ？おんぶしてあげようか？」

子供には　少しばかりしんどくなりそうだと考えた為、提案した。

サラは初めは渋っていたが、

やはりしっかりしていても甘えたい盛り。

「ありがとう！！おにいちゃん！！」

そう言つて、背中にピョンツと飛び乗った。

「よし、行くぞー！」

「うん！！」

おにいちゃんのせなか・・・　あつたかい・・・

サラは幸せ間でいっぱいだった。

寝てしまいそうになるのを必死に我慢しながら・・・

まるで包み込んでくれているような感覚を感じていた。

サラにとっては少し名残惜しかったが、

目的地へ到着した。

「ここだよ！」

サラから声がする前にオレも確信していた。

そこは、鉾山の町を少し高い位置から見渡せる絶景ポイントだった。

夜になれば 星空を見あげる事ができるだろう。

朝、太陽が昇る瞬間も時間によつたら見られるかもしれない。

「すごいね・・・ この町にこんな場所があるなんて。」

素直にびっくりしていた。

「えへへ！すごいでしょ！おひさまがちょうどあたるから、よこに

なるとポカポカしてきもちいいよ！」

そう言っつてサラは横になった。

「そうだね・・・ うん！気持ちいいな。」

アルも一緒に横になる。

「ここ！おにいちゃんにおしえたのがさいしょだからね！」

笑顔でサラは言った。

「オレが最初でよかったのかい？」

頭を撫でながら聞くと、

「うん！おにいちゃんとここにきてみたかったの・・・ いろいろとおしえてくれたし、そのおれいだよ。」

そして、サラは少し顔を赤くし、

「それに・・・ だいすきなひとといっしょにきたかったから・・・」

答えた。

その言葉に少し照れくさかったが、

アルは笑顔を作り、

「ありがとうな・・・サラ、この景色・・・今日の事、オレは絶対忘れない。大切にするよ・・・」

サラの頭を胸に抱きながら答えた。

「うん・・・ もうちょっとここで おやすみしよう!」

そのまま 2人で暫く景色を楽しんでいた。

#4 大切な思い出（後書き）

ありがとうございました！！

#5 静寂を破る絶望（前書き）

よろしくお願いします!!

#5 静寂を破る絶望

「きゃあああ！」

1～2時間後だろうか、

突然 静寂な時が打ち破られた。

それは 悲鳴が聞えたからだ。

「なっ なんだ！サラ起きろ！」

「んっ……」

まだ 眠たそうにしていたが、続けて悲鳴が聞えてきた為すぐに目が覚めたようだ。

「な……なににおにいちゃん…… みんなのこえが……」

「町へ戻ろう！」

そのままサラを抱えて来た道を引き返していった。

少し開けた場所で・・・ 悲鳴が起きた理由が分かった・・・

「モツ モンスター!!」

それは、オレの体ほどある泥人形・・・ゴーレム数匹と狼のような獣数匹がいたのだ。

「おにいちゃん・・・こわいよ・・・」

サラは震えていた。

「サラ・・・ オレの後ろにいる。」

サラを後ろにやり、モンスター魔物から遠ざけた。

ガルルルル・・・

今にも飛び出してきそうな感じがした。

この感じがモンスター魔物の臨戦態勢なんだろう。

（迂闊だった・・・ 坑道の中にモンスター魔物はいると聞いていたが、町ま

で出てくるなんて・・・)

魔物モンスターがいるのは坑道の奥の方・・・

町にまででてくることはこれまでに一度も無かったと聞いていたのに・・・

(嘆いていても始まらない！サラは絶対に護らないと・・・ けど丸腰のオレに何ができる？ 隙を見て逃げ出すか？ しかし 敵の数が多い・・・ 何か無いか？？)

あたりを見渡す・・・

しかし 武器になるような物は無かった。

次の瞬間！

ガアアアアア！！

一斉に魔物モンスターが飛び掛ってきた。

「くそ！！ これでも食らえ！！」

蹴りを放つ。

ギャン！！

やぶれかぶれだが、一匹にはカウンター気味に当たり、蹴り飛ばす

ことに成功した。

しかし・・・

ガッルアアアア！！

後の数匹の攻撃はかわせず、爪・牙の連撃を受けてしまった。

「がつ！！」

膝をつき痛みを堪えようとするが、

グオオオオオ！！

次は移動速度の遅いゴーレムがその豪腕を振り上げそのまま放った。

ドガアアアア！！

「がはああつ！！」

洞窟の壁に激突した。

「く・・・くそっ・・・」

アルは体がバラバラになりそうな感覚に襲われていた。

サラはその場から動けず、涙を流しながら、

「おっ おにいちゃん！！！！」

サラは力いっぱい叫んだ。

その叫びに魔物達モンスターが反応し、

標的を動けないアルでは無く、サラに変えた。

「くそお！サラ！！に にげろー！！」

叫ぶ・・・

しかし ショックが大きいのかサラはその場で震えているだけだった。

もう 数秒もせずに 魔物達モンスターは襲い掛かるだろう。

「頼む！逃げてくれ！サラーーーー！！」

動けない体にムチを打ち、立ち上がろうとするが体が言う事を利かない。

絶望がすぐそこまで迫っていると言つのに・・・

その時、

ガアアアア！！

モンスター
絶望達が一斉に飛び掛った・・・

サラに届くか届かないかの刹那の瞬間

目の空間が・・・いや・・・

「世界」が止まった・・・

#5 静寂を破る絶望（後書き）

やっとモンスター出てきました♪

テイルズですしね♪

読んでくれた方がとうございました!!

#6 覚醒した得体の知れぬ力（前書き）

よろしく願います！

#6 覚醒した得体の知れぬ力

[illegible][illegible][illegible]

「な……なに??」

理解できない。

なん・・・だ・・・？
なんなんだコレは・・・？

《アルよ……我が……を授かりし……よ……》

!!!

これは
・
・
・

いつか……確かに聞いたことのある声が再び聞えた。

「何なんだ！これは！この声は！」

《おちつけ・・・ 我が・・・ よ・・・》

やはり途切れ途切れの内容だ。

肝心の所が聞えない。

《今こそ・・・ 力を・・・ に 解放しろ・・・》

「な・・・なに？」

《我が声に・・・ その身を委ねろ》

声が・・・ハッキリ聞こえた。

「どういうことだ！ 何なんだお前は！」

《早くせぬと・・・ その娘が死ぬぞ？》

「つつ！！」

その「声」に鼓動が高鳴る・・・

「頼む・・・ あの子は助けさせてくれ・・・ お願いだ。お願いします！」

今の思いの全てをその「声」にぶつけた。

《我が声・・・ 身を委ねろ 主なら出来る・・・ 自身を解放しろ！》

その声が終わると同時に、

「世界」が再び動き出した。

「いやああああ！」

サラの叫び声だ・・・

「っ！！！」

気付いたら・・・

魔物達モンスターとサラの間に入っていた。

「おにいちゃん！」

「遅くなった、ゴメンな。」

体中から力が・・・不思議だ。力が湧くような感覚だった。

単なる力じゃない・・・

これは・・・譜術の・・・？

一瞬考えをめぐらしたが・・・あまり考えている時間は今は無い！

「我らを護れ聖なる盾・・・ 干戈を和らぐ障壁^{かへ}となれ」

掌を突き出す。

「ミスティック・シールド！」

バキィィィン！

2人を包み込むような壁が現れた。

ドカアアッ！

ギャン！！

モンスター
魔物達は壁に正面衝突した。

突進の勢いそのままに來たため結構なダメージになったようだ。

「サラ・・・ この中にいれば大丈夫だ。これが俺たちを護ってくれる。ここから出るんじゃないぞ。」

まだ震えの止まらないサラだったが、アルの声を聞き少し震えが収まった。

「おにいちゃん・・・ は？」

どうするつもりかと聞く・・・

「あいつらがいるとここから出れないだろ？」

そう言つて魔物モンスターの方を向く。

「あ あぶないよー！」

サラは目に涙を溜め 腕にしがみついていた。

そんなサラの頭の上に手をおき、

「大丈夫・・・ サラのおかげで少し思い出した事があつたんだ・・・
記憶・・・ オレの戦いの記憶をな・・・」

記憶を取り戻したのは嘘だ。

思い出したわけではない。

これは・・・ この力はオレのものではない。

まるで体に馴染まないのだ。

昔から使っていたのならば、少しは馴染むはずなのだが・・・

借りている力・・・その表現が一番しっくり来る。

しかし 今、サラを護れるならなんだって良い！

そして軽くウインクしながらサラの頭を撫でる。

「あ・・・」

サラは落ち着きを取り戻し笑顔になった。

大好きな人に撫でられているからだ・・・

「すぐに終わらせるよ。 町の皆もみんなも心配だしね。」

そう言うとまだ結界の周りで警戒している魔物達モンスターの方へ振り向き結界の外へ出た。

「さて・・・ 派手にこの得体の知れない「力」を使うとこの坑道が崩れるかもしれないからな・・・ 魔物モンスターには魔物モンスターを・・・だ・・・
サラを襲おうとしたお前達をオレは絶対に許さない・・・」

アルは魔物達モンスターを睨みつけると共に、詠唱にはいる・・・

「熱く滾りし獄炎・・・ 聖なる龍の姿となりて・・・ 我が敵を喰らい尽くせ」

アルの腕が炎で包まれるとその炎の形が変わっていく・・・

「ドラゴ・フレイム！」

ドゴオオオオッ！！

それはまるで意思を持っている炎龍・サラマンダー・

サラマンダーモンスター
炎龍が魔物達に襲い掛かった。

ギアアアッ！

グオオオオアッ！！

瞬く間に、モンスター達は炎の龍に捕らわれ、焼かれながら逃げ
いった。

#6 覚醒した得体の知れぬ力（後書き）

詠唱に関してはチヨコチヨコ言葉を変えた テイルズで出てくる詠唱分ですw

どこから取ったか分かる人にはわかるかと・・・ 苦笑

ありがとうございましたー！

#7 助けられた命（前書き）

テイルズ エクシリアはちょっと物足りなかったですね・・・

賛否両論ですが！オレは物足りなかったものの楽しめました。

これからもいい作品を生み出してもらいたいものです！！

#7 助けられた命

「・・・・・・・・・・・・・・・・ふう よかった。逃げてくれたか・・・」

安堵のため息をしながら、腰を落とした。

「おにいちゃん!!!」

背後に軽い衝撃を感じた。

サラだ・・・

「おっ おにいちゃん・・・ヘーキ??? ケガしてないっ!？」

泣きながらすがりつく・・・

大声で泣いていた為多少耳に響いたが、それが心地よく感じるのはサラが無事だったからだろう。

「ああ、大丈夫だよ・・・ サラも・・・無事でよかった・・・」

サラの手を握り抱きしめ返した。

「ははは・・・ 本当に・・・本当に・・・良かったな・・・」

「うああああん!おにいちゃああん!」

暫くの間サラは泣き続け・・・

そして泣き声が聞えなくなつた。

眠つたのだ。

「すー・・・すー・・・すー・・・」

無理もない、

つき先刻まで襲われかけていたのだ。

小さいサラにとって、凄まじいストレスだったのだろう。

アルに抱かれている時、安心しきり、眠ってしまったのだろう。

「よしっ・・・」

サラを抱きかかえ町の方へ向かつた。

町の方では・・・

被害こそ少なかったが、まだ少々モンスター達はいた。

坑道の入り口付近に男達が集まり抗っていたのだ。

何体かは町に入った形跡はあったが、全て撃退していた。

まだ予断を許されないが、少なくとも事態は收拾に向かっていると感じた。

「ガーランドさん!!」

坑道の入り口より少し離れた場所で、怪我人を運んでいるガーランドを見つけた。

「あ・・・ おお!!アル!サラ!!無事だったか!!心配したぞ!!」

すぐさま駆け寄り、寝ているサラにお構いなく2人を抱きしめた。

「う・・・ううん・・・」

サラは苦しそうな声を上げたが、表情はとても穏やかだった。

「はい・・・ガーランドさんも良かったです・・・ 魔物に襲われた時はみんなどうなっているかと心配でした・・・」

「お前達も襲われたのか!!それによく無事だった・・・ サラの事も・・・ 本当にありがとう・・・」

抱きしめる力が強まる。

「ははは・・・オレも良かったです・・・ さあ まずはサラを安全な場所へ。」

そう言うとガーランドはアルとサラを開放した。

「そうだな。ハグは後でゆっくりとするとしよう。こっちだ、レイが町の皆を手当てしている。」

そういつと集会場へ向かった。

「サラ！！！」

ガーランドにおぶられている、サラを見たレイは、涙を流しながら駆けつけた。

「サラ！！ぶっ 無事なの！！！」

「ああ！アルが連れ帰ってきてくれたよ。」

ガーランドはアルのほうを指差した。

「ありがとう・・・本当にありがとう・・・アル・・・」

涙を流しながらアルに礼を言った。

「いえ・・・良いんですよ・・・ オレも良かったです・・・ みんな・・・皆無事で・・・」

アルもまた目に涙を溜めた。

その時、

力が抜けたのか、背中・腕に鈍い痛みが走った・・・

「ぐっ・・・」

その場にアルは膝をついた。

「「アル!!」」

2人はアルを抱え傷を確認した。

「こいつぁ・・・ひどい・・・ お前ここまでの傷をおって・・・」

「アル・・・」

傷を見てサラとガーランドは悟った。

おそらくは、サラを庇ったのだらうと、

サラには 傷ひとつない、所々汚れた箇所や、服が破れていたりしたが、

それは遊びにいく時は、大抵つけるので日常茶飯事の事だ。

レイは、アルを抱きしめた・・・

そしてガーランドもまた、レイとアルを包み込むように抱きしめた。

「こんなになるまで・・・ サラを護ってくれたんだな・・・アル・・・」

「ありがとう・・・ありがとう・・・ありが・・・とう・・・」

レイは涙を流しながら・・・ガーランドは声を振り絞りながら言った。

「ははは・・・安いものです・・・サラの命に比べればこのくらいの傷・・・本当に皆無事でよかったです・・・」

アルもまた、2人を抱きしめた。

傷の痛みはまだあったが・・・

とても・・・とても心地よかった。

「アル・・・痛まない？」

暫く抱きしめられていたが・・・

まだまだすることがある！とガーランドは再び町を護る為外に出て行った。

アルも行こうとしたが、レイとガーランドに止められた。

まずは傷の手当てをしろ！って凄い剣幕で・・・

「はい！大丈夫ですよ・・・レイさん。それに・・・オレにはこれがあります。」

すつと立ち上がると、

他の怪我人の所へ行き、しゃがみこみ怪我人に手を当てた。

すると・・・みるみるうちに傷が治っていった。

「！！そつ・・・それは治癒の譜術・・・セランスフォニム第七音素？アル・・・
あなた第七音譜術士だったの・・・？という事は・・・ひょっとして記憶が！？」

治癒の力に驚きアルに聞くが。

「いえ・・・なんて言えはいいんですかね・・・洞窟で魔物に襲われたショックで・・・何か思い出したんです。オレが使える力のことだけです・・・ね。」

頭に「声」が聞こえたことは説明を省いた。

上手く説明する自信がなかったからだ。

「なので、自分の事は大丈夫です。怪我人の治療を手伝います！」

レイにそう言い運ばれてきている怪我人の治療に当たった。

「ふふふ・・・あなたが来てくれて本当に良かったわ・・・」

少し驚いた表情をしていたが直ぐに穏やかな顔になり

小さな声で・・・呟いた。

「え？何か言いました？？」

治療に当たりながらレイの方を見た。

「いーえ！ありがとうございます！って言ったただだよ！」

レイは笑顔を作り、アルと共に看護に当たった。

#7 助けられた命（後書き）

ありがとうございました！！

#8 絶望からの刺客（前書き）

よろしくお願いします!!

#8 絶望からの刺客

暫くして・・・

主に重症患者を優先し、治療に当たっていた。

見た目ほどは皆酷くはないようだ。

「ふう・・・ これで大丈夫でしょう・・・ 後は皆暫く安静にしていれば・・・」

汗を拭い一息ついた。

「ええ ほんとにお疲れ様・・・ ありがとう・・・」

レイはタオルを出し、アルに被せた。

「ははは・・・ お礼はいいです。オレだってあなたがいてくれなかったら野垂れ死んでいたんですから・・・ その恩があります・・・ そのことに比べたら大したことないです。」

笑いながら呟いた。そして、

「これでおあいこつてことでどうでしょうか？」

レイの方を見て言った。

レイは涙を拭い、笑顔を作り、

「そうね・・・あなたがしてくれたことの方が大きいと思うけど・・・
・ そういつても納得してくれそうにないわね？」

答えた。

「あははは！そうですね。」

2人ともいい笑顔だ・・・

しかし その笑顔は直ぐに・・・

ドゴオオオオオオオオオオ！！！！

轟音と共に消えるのだった。

「なっ なんだ！！」

凄まじい音だ・・・

「そっ・・・ 外から・・・ まさか・・・」

レイは嫌な予感が頭の中に走り、

外に飛び出していった。

「レイさん！！待って！！」

アルもその後につき集会所を飛び出した。

そこで2人が見た物・・・

「化け物・・・・・・・・」

レイは腰が抜けてしまいその場に足から崩れ落ちてしまった。

「あれは・・・いつたい・・・」

目の前の化け物・・・そう、坑道の入り口は集会場から大体50メートルほど離れている。

なのに、外に出ると直ぐに分かってしまった。

恐らくはリーダー格のゴーレム・・・

先ほど遭遇した魔物と同じ種類の類だろう・・・

だが、1つだけ・・・

圧倒的に違うところがあった・・・

体^{サイズ}格の違いだ。

縦はどれくらいになるのか・・・遠目から見ても規格外のデカさだ

と感じる。

その上アルとレイは・・・

1人の男性がゴーレムの右手に鷲づかみされ投げ飛ばしている衝撃^シ場面を見てしまった。

ただの人間では抗えない事が瞬時に理解できた。

少なくともレイは・・・そう感じた。

先ほどまで襲ってきていた魔物とはワケが違う・・・

「も・・・もう・・・」

レイは足が・・・体全体が震えていた。

ダメだ・・・っと言うその前に。

「レイさん！！！！」

アルがレイの両肩を掴み強く揺さぶった。

「ア・・・アル・・・？」

まだ気を保ててないようだ。

「しっかりしてください！早く怪我人を町の外へ連れて行ってください！少なくともここよりは安全だ！皆まだ万全じゃあないですが、動く事は問題ないハズです！早く！！」

いつものアルの顔じゃない・・・

鬼気迫るかのような表情だった。

そのおかげで、レイは気を取り戻す事が出来た。

「わ・・・わかったわ・・・」

震える体に一括し 答えた。

「お願いします!」

そしてアルは坑道の方を向いた。

「アル!あなた・・・どうするつもり!?!?」

それに気付いたレイは大声で叫ぶ。

「あれを止めます。」

振り向かずそう答える。

あまり時間を掛けるわけにはいかないのだ。

「そ・・・そんなのムリよ!!! 行っちゃダメ! 今度こそ死んでしまう!」

レイが叫ぶ。

その叫び声のせいか・・・周りの轟音のせいか・・・

目を覚まし外へ出てきた人がいた・・・

「おっ・・・おにいちゃん!!」

サラだった。

「大丈夫！やりようはあります！こうやって話している間も被害が増えていく・・・オレを信じてください!!」

アルはそういうと、付けていた治療器具を全て外した。

その時、背中に軽い衝撃が走った。

「おにいちゃあぁん・・・ いかないで！だめだよ・・・ しんじやうよ・・・」

サラだ・・・

ぼろぼろと涙を流しながらアルにしがみ付いた。

確かに時間が惜しかったが、振りほどくわけにはいかない。

サラの方を向きなおし、

「サラ・・・ オレを信じてくれ。」

笑顔で話しかけた。

「で・・・でも！でも！！」

サラはまだ泣いていた。

いつもの笑顔は消えうせ、

大切な人が死んでしまう・・・ 会えなくなってしまう・・・

そんな不安感でいっぱいだったのだ。

「サラ。大丈夫だ。おにいちゃん！強いのは知っているだろう？知ったのは今日だけだな。」

笑いながら話し続ける。

「あそこで、一生懸命戦ってくれている人たちを助けなきゃ！サラやレイさんの大切なガーランドさん・・・パパもあそこにいる・・・必ず連れて帰ってくるから。」

サラは涙を拭いながら・・・

「ほ・・・ほんとうに？？ おにいちゃんも・・・パパも・・・サラのところにかえってきてくれる？？ ぜったい??」

アルを見ながら・・・ 何度も出てくる涙を拭いながら・・・サラは言った。

「ああ！約束だ！！オレは約束は破らない・・・ そうだろう?」

「う・・・うん！」

サラは必死に涙で汚れ放題の顔で笑顔を作った。

そしてサラの頭を撫で、レイのほうを向き。

「レイさん、サラを早く！」

口早にレイに伝えた。

レイは最初こそは強く反対していたのだが。

サラとアルのやり取りを見ていて・・・ 反対するのをやめた・・・

「わかった・・・あなたを信じる、アル。あの人を・・・お願いします。」

サラを抱き寄せ、アルに言った。

「はい。 任せてください。」

アルは駆け出した。

まだ暴れまわる巨大ゴーレムの方へと！

#8 絶望からの刺客（後書き）

人を手づかみで投げ飛ばす化け物にどうたいこうすんのさー！って
自分で思っちゃいましたw

がんばれー！アル！

#9 負けられない戦い(前書き)

やあーっと 原作キャラでできます

よろしくお願いします!!

#9 負けられない戦い

町の住民は必死に抵抗を続けていた。

ここが破られれば・・・

背後にいる自分たちの家族が・・・

その思いだけが彼らを突き動かしていた。

しかし、状況は変わらない。

1人・・・また1人と動けなくなっていく・・・

「くそお！！　こんな化け物どうすりゃ良いんだよ！！」

一通りの銃火器・刀類で巨大生物の攻めのセオリーである足を攻撃していたのだが。

化け物ゴレムはそれをものともせず、攻撃を繰り返していた。

鉱山の男たちの仕事は戦う事ではない・・・

鉱山の力仕事で体力はあっても戦いにはまるで素人なのだ・・・

その上ここアクゼリユスは領土問題もあり、マルクト帝国に所属す

るのだが、その問題もあつて軍隊も迂闊には動いてくれない。

ガーランドは町一番の力持ちであり、軍隊にいた経験もある為戦いなれていたが、

ここまでの敵とやり合つた事は無かつた。

ついに、皆の頼みの綱であつたガーランドも、

ゴーレムの譜術「ロックブレイク」を脚に直撃してしまい。

動けなくなつてしまつた。

その他の皆も満身創痍だ・・・

「く・・・そあ・・・ここまで・・・なのか・・・オレの後ろには・・・あいつらが!!」

力を振り絞るが・・・

体が言う事を聞いてくれない・・・

ガーランドは、ゴーレムがデカい腕を振り上げるのを見て、覚悟を決めた。

グオオオオ!!

(アル・・・頼む・・・俺の家族を・・・)

目を閉じた・・・そして無情にもゴーレムは腕を振り下ろした。

誰もが絶望していたその時！

「我らを護れ聖なる盾・・・ 干戈を和らぐ障壁かへとなれ」

「ミスティック・シールド！」

ガキイイイン！！！！！！

凄まじい激突音が響いた。

（なんだ・・・ 今の・・・ まだオレあ・・・ 死んで無いな・・・
今のは・・・）

ガーランドは目を開ける・・・

そこに見えたのは、

「ガーランドさん！！しっかりしてくれ！！！」

アルだった。

アルは壁の様な物で化け物の攻撃を受け止めていた。

「ア・・・ル・・・？」

ガーランドは突然の事で混乱していた。

そのガーランドを担いだ者がいた。

??? side

「ガーランド！逃げるぞ！！」

ガーランドの仕事仲間の1人、ファンだ。

「ファ……ン……こいつぁいったい……」

ガーランドは朦朧となりながらもファンに聞く。

「オレも聞きてえよ！あの化け物がおめえに攻撃してくる時、アルがオレのそばに来て「アイツを止めるからその隙にガーランドさんを頼む」って言ったんだよ！無茶だって言おうとしたんだがな！言ったと同時に駆け出しやがった。あんな小僧が命張っていったんだ！オレもいつまでもおねんねしてるワケにゃいけねえだろう？」

「アル……が……？あいつ……くそ！あいつ……を1人で戦わせるわけには……」

ガーランドは目に生氣が戻り体に力を入れた。

「動くな！じっとしてろ！！悔しいが俺たちにやアレはどうにもなんねえんだよ！アルに……掛けるしかなんねえんだ！」

ファンも納得したわけじゃなかった……

あんな・・・子供に・・・任せるなんて・・・

だがあの場にとどまりやあ今のボロボロの俺たちじゃ何も出来ない・
・寧ろ足手まといになる事も理解できていた。

「ファン・・・!」

理屈は分かる・・・だが、

ガーランドも納得できなかった。

「ああ!最低だ!!一人で戦わせるなんてよ! なさけねえよ!
!だがな・・・ アイツがやられたら次は俺が真っ先に死ぬ!!死
んでも 家族には指一本触れさせねえ!!」

ファンの強い決意が・・・感じられた。

「おい・・・ オレも一杯つき合わせろや・・・」

ガーランドは、にやけ顔をつくり・・・

答えた。

「ああ・・・わかってるよ!!」

そして、ファンはガーランドを戦闘範囲から離れたところまで運ぶ
と、ガーランドを地面に座らせ、他の仲間たちを運ぶため、再び戻
っていった。

side out

グオオオオオオオオ！！！！

ドゴオオオオオオオオオン！！

何度も何度もその巨大な拳をぶつけてくる・・・

「ぐうつうつ・・・」

なんて威力だ・・・

先ほどのゴーレムたちに比べればまさに大人と子供の差だ・・・
腕に鈍い痛みが再び走る。

「くそっ！！」

腕を放したその時、

パキヤアアン！！

シールドが・・・破られた。

破られる瞬間、後ろに下がった為、

何とか直撃は避けられた。

「堅牢なる守護の力・・・来い！」

「バリア！」

自身防御強化の譜術。先ほどとは違い自らの防御力を上げる譜術だ。

焼け石に水かもしれないが・・・

ゴーレムは体の一部を散弾銃のように飛ばす攻撃もしてきている。

あるのと無いのでは全然違う！そして。

「天を切り裂く力！ 雷撃の剣となり我が敵に降り落ちろ！！」

「サンダー・ソード！！」

雷を帯びた巨大な紫色の剣がゴーレムの足に突き刺さる！雷撃の有る斬撃だ。

バリバリバリッ！！　ズツシャアアン！！

グルオオオオオ！！

初めてのゴーレムの叫びがあたりに響いた。

「うおおお！！」「す……すごい！！」「頑張れ！！！」

倒れていた人たちもアルに気付き、力の限り声を上げる。

アルは逃げて欲しかったが……彼らは足を負傷し動けない。

だからと言って、運び出そうとすれば格好の的だ。

……鉱山の男達は決して仲間1人だけ残して逃げるという選択肢は持ってなかったのだ。

皆ファンやガーランドのように……

「アルが倒れたら次は俺だ……」と皆、そう考えていたのだ。

その決意は嫌でも感じる。

そして責任重大になる……

（オレが倒れるわけにはいかない！）

まだ暴れているゴーレムに向きなおし身構えた。

??? side

「これは・・・何事ですか？」

ここはマルクト帝国の軍艦タルタロス。

あれは・・・アクゼリウスですか・・・

戦塵が見える・・・

場所は鉾山の町アクゼリウス。

確かにマルクトの領土になっても国境に位置するせいか、両国の小競り合いも少なくない。

だが、あまりにも巨大な戦塵だった。

「大佐！」

使いを出した部下が帰ってきた。

無闇に、軍艦で近づく事は出来ないのだ 小競り合いならば混乱をさらに増す可能性が有る。

「何か分かりましたか？」

大佐と呼ばれる長身・長髪の男が尋ねる。

「はっ！！ 確認に向かったところ！鉾山奥より大量のモンスターが出現したとの事！ 彼らは撃退したそうなのですが、その後、巨大なモンスターが現れ、町で暴れている模様です。」

敬礼しながら町の現状を伝えた。

「巨大なモンスター・・・ ジェイド・・・ 時間がないのは分かりますが」

大佐に比べると少し背丈の小さい中性的な顔立ちの男が不安そうに伝える。

「・・・分かりました。問題はありませんが、町の住人を救う為です。そういうことならば問題はないでしょう。ただし、少数精鋭でいきます。軍艦がそのまま行きますと混乱が有るでしょうから。」

大佐・・・ジェイドはそういうと出発の準備を شدした。

「もー！イオン様は！！ここに残ってくださいよ！！」

続いて出てきたのは・・・ 小さな女の子だ・・・

歳は10代前半だろうか？

にしても軍艦に乗るには少し場違いな気がするような子である。

「いいえ アニス。僕も行きます。町の住民の人はきっと傷ついてしまっている人達もいるはずです。ならば僕の力が役に立ちます。」

イオンと呼ばれている中性的な顔立ちの男性（男の子かな？）。

行くなと言われているが　行く気満々のようだ。

「もーイオン様は一度言うつと聞かないんだから・・・　はあ」
「じゃあわたしも行きますよ！」

アニスと呼ばれている女性。（女の子かな？）

この会話を聞くと彼女はこの男性の護衛なのかもしれない。

「じゃっ　話はまとまりましたね！さっ　早速行きますよ。」

「もー　大佐もあつさりしすぎ！少しは止めてくださいよ！！」

「はっはっはー」　イオン様は言っただくらいでは止まらないでしょう？」

「すみません。ジェイド、アニス。」

「もー　わかりました！ってば！！　早く行ってちゃっちゃと解決しちゃいましょう！！」

「「はい！」はい。」

そう言つて、3名＋警備隊数名の少数精鋭は艦を降りアクセリウスへ向かった。

s
i
d
e

o
u
t

#9 負けられない戦い（後書き）

出てきました、タルタロス!!

そして・・・出てきました。例の師団長&腹黒ちゃん&天然君！

さて・・・どうなるのやら・・・

ありがとうございました!!

#10 共闘・・・そして決着（前書き）

ちよつと短いですー！
すみませんー！苦笑

#10 共闘・・・そして決着

アル side

雷撃の剣をゴーレムの足に突き刺してから、
敵の動きが鈍くなっていた。

「よし!!」

すぐさま次の詠唱に入ろうとするが、

カッ!!

ゴーレムの目の部分が光ったと思ったその瞬間!!

ロックブレイクが発動!

ドゴオオオン!!

「くそっ!!!!」

直撃さえは避けれたものの、相手の譜術による攻撃のスピードは中々の速さだった。

「詠唱しながら・・・回避しながら・・・攻撃はきついなせめて奴に隙が出来れば・・・」

譜術が基本的に最大の攻撃手段、

これほどの相手には接近戦はきつい、陣形で言えば後衛が望ましい。だが・・・ここにはもう戦える人間はアル１人しかない・・・

厳しい状況だった。

だが決まるのであれば、決め手はある・・・とりあえず頭に浮んでいる譜術の中では随一の力だ。

まだ力の底は見えない・・・が、とりあえず奴を倒すのには十分だと思われる。

だが・・・

「使う隙が中々出来ない・・・な それに、こいつの攻撃はいちいち周りを巻き込む。このままじゃ被害が拡大してしまう！」

舌打ちをしながらゴーレムを睨みつけていると・・・

「炸裂する力よ・・・」

「エナジー・ブラスト!!」

後ろから声が聞えた・・・

キュイイイン・・・ ドガアアアン

その次の瞬間 爆発のような衝撃がゴーレムを襲う。

グオオ!!

突然の衝撃に驚いたのか、予想以上に呻き声を上げた。

振り向くと・・・男が立っていた。

「あ・・・ あなたは？」

「今は自己紹介をしている暇はありません。 アレを早く仕留めましょう。」

男はそういうと何処からか槍を取り出し、構えた。

「そうですね・・・ 何にしてもありがたいです!これで・・・仕留めれる。」

2人になった事で術を使用する隙が圧倒的に多くなった。

「瞬迅槍！！」

男はそのままゴーレムの足に槍を突き刺す！

かなりの威力なのだろう、ゴーレムの足がぐらついた。

そこですかさず追撃を入れる・・・

「唸れ烈風！大気の刃よ、切り刻め！」

「タービュランス！」

巨大な竜巻が出現し・・・ゴーレムを切り刻んでいく・・・

巨体のためか浮き上がる事はなかったが、動きを封じ込んでいた。

絶好のチャンスだ！

アルはその瞬間、頭に浮んでいる術式を書き・・・

「・・・3つの裁き・・・来れ黄泉の門！この場に集いて
門を開け三幻神！！」

異常な・・・力が集束していた。

ジェイドもそれに気付く。

「つつ！（何ですか・・・！これは！！）」

あの男から迸る凄まじいエネルギー・・・

これは・・・まずい！！

「おい！その場から離れろー！！」

アルは男に叫ぶ！

ジェイドはその言葉の前に既に回避行動を取り離れていた。

「これで最後・・・ インディグナイト・デストラクション！！」

キイイイーン！！！！

三本の・・・光の柱がゴーレムを囲む・・・ 正三角の形に・・・

グルオオオ！？

ゴーレムは何が起こるか悟ったのか？

その場から離れようとするがもはや手遅れ。

三本の光の柱が上空で1つになり・・・

そのまま、巨大なゴーレムの頭上に落ちる！

ズガアアアアアアアアアアアアアアアアアツツ！

．．．凄まじい破壊力．．．まさに神の裁き．．．それは決して
比喩ではないと感じるほどに．．．

ゴーレムは、叫ぶまもなく、そのまま沈黙し……姿かたちを残さず消滅した。

#10 共闘・・・そして決着（後書き）

ありがとうございました！！

遅くなりましたちょっと説明！オリジナル譜術！！作者都合上w

【ミスティック・シールド】

聖なる障壁が現れ、対象者を包み込むように守る防護魔法。

耐性は如何なる属性の攻撃も防ぐが、耐久値は勿論あり、限度を超えると破壊される。

彼・・・アルが守りたいと言う気持ちから生まれた力だそうだ・・・

アル曰くw

【ドラゴ・フレイム】

炎が龍の形となり、敵に襲い掛かる火炎系の譜術。

火玉を飛ばすファイアーボールとは違い、炎そのものが意思を持っており、術者とリンクしている。

即ち悪しき者が使用すれば、いつまでも対象者を執拗に攻撃を加え滅する事が出来る。

だが、アルはそこまで残虐な事はしたくないと考えているため、逃げたなら直ぐに解除するようにしている。

術使用の際は全くの無防備な為、接近戦には脆い面も勿論ある。術を使用するのをやめれば動けるが、その瞬間に炎龍は姿を消す。

【インディグネイト・デストラクション】

これは光の属性を持つ純粹物理破壊攻撃。

詠唱の通り 3つの裁き・・・ 三幻神

即ち・オルフェウス

ゼウス

イシユタム

この3つの裁きが1つとなりて、敵を滅する。

原子レベルまで分解するかのような、無数の超高密度の光の礫が対象者を細かく分解していき、如何に強力な防護壁を使用したとしても、食らえば唯では済まされない。

難点は 詠唱する際 三幻神を呼び出す為の膨大な力を有する為、使用者の魔力は根こそぎ持っていかれる。

この力は広範囲ではない為使用する際には十分に注意しなければならぬ。

はい・・・ 適当に作りました！！

テイルズに実際にある魔術・譜術・・・ e t cをもじったものです。

テキトーにながして下さいー！

#11 薄れゆく意識（前書き）

よろしく願います!!

#11 薄れゆく意識

ゴーレムも倒した……

町も無事だった……

「ふう…… お…… おわった……」

体中の力が一気に抜ける……

「…… 彼は…… 一体……」

あれ程の譜術は見たことがなかった。

自身も軍人として数多の戦場を駆け巡ってきた経験がある。

その中で最も危険と判断した攻撃を天秤に掛けてもコレに比べたら小さい……

世の中にはこれ程の術を操る者がいるのかと、

暫くジェイドは立ち尽くしていた。

「うおおお!!!」「アル!!!!」「っ!!!!!!」

砂埃が風に舞いながら消え、あるの姿を視認した住人は一目散にア
ルの方へ駆け出した。

その中にはファンやガーランドもいる。

「ありがとな！！お前すげえフォニマー譜術士だったんだな！！つか！記憶戻ったのか？」

ガーランドとファンが集まりもみくちやにする。

「ははは……… いっ いや 記憶の方はまだ…… 力だけ思い出したみたいで……」

もみくちやにされかなり疲労感があつたが、大した事ではない。

皆無事だった……

喜びの方が大きい。

「それより……礼はあちらの方に」

そう言うところアルは共に戦ってくれた男の方を向く。

「貴方の助太刀がなければ、倒しきれなかった…… どうもありがとうございます。」

そして頭を下げた。

「いえ、軍人として当然のことをしてだけです。礼には及びません。」

笑顔になり、そう伝えた。

しかし頭の中では、

（彼の力は・・・まるで見たことのない・・・私が使える譜術に似ていますが中身は別物のようだ・・・大変脅威ですね・・・彼の素性・・・力・・・全て調べた方が良いでしょう。今は大事な任務がありますが・・・理想は我がマルクト軍に入ってもらいますが・・・ムリに連れて行くとかかなり反感を買いそうですね・・・さて、どうしたものか・・・）

アルをスカウトする事を考えていた。

当然だ。

これほどの譜術・・・彼は見たことがない。

キムラスカ
敵国の方が彼に気づき、そちら側に行くのはかなり危険・・・

軍人ならばそう考えるだろう。

頭の中でどうするか策略をしていると。

「アルおにいちゃん！！！」

「うおっ！！！」

またまた背後から声と衝撃が・・・

もちろん！

サラだ。

「おにいちゃん！おにいちゃん！！！！　よかった・・・ほんと
うに！よかったよぉー！！」

そのまま、アルにしがみ付いた。

「ああ！　もうこれで大丈夫だ！本当に終わったよ。・・・サラ
も無事でよかった・・・　レイさん・・・ガーランドさん・・・そ
れにみんなも・・・」

アルはサラを抱きしめながら涙を浮べ周囲を見渡した。

皆アルとサラを微笑ましそうに見ていた。

ガーランドとレイもまた抱き合い。

そしてアル達に近付き・・・

また抱きしめた。

「・・・よかった・・・　本当に・・・　今日は　ご馳走を作るわ・
・・・　貴方も・・・　どうかうちに寄ってくださいね！」

レイはジェイドの方を見ながら言った。

「御心遣いありがとうございます・・・」

任務を優先したいところなのだが・・・

ジェイドは彼の事を優先させた方がいいと判断した。

「さあ・・・ みんな！とりあえず町の大掃除はまた明日だ！ 今日には！みんなで騒ごう！！この町を守ってくれたアルを囲ってな！！」

ガーランドは高らかに宣言した。

皆それに乗リ、雄たけびのような歓声を上げる・・・

「ははは・・・ これじゃ・・・ ゆっくり寝れないかもな・・・
・ サラ、又あの秘密基地に行こうな！」

サラに笑いかける。

「うん！！」

サラも満面の笑顔で答えた。

「「ジェイド！」大佐あ！！」

2人がジェイドの方へ駆けつけた。

「終わったんですね・・・ 良かった。」

「ええ・・・ しかし 気になる事がありまして・・・」

「ええ！何かあったんですか！？大佐がそんな風に言うなんて！

「！」

アニスは露骨に驚いていた。

「アニス・・・」

「はっはっはー まあこういうこともあるんですよ！ 気になるのは彼の事です。」

視線を送る・・・

「???あの男性ですか?」

「ええ・・・」

ジェイドが又難しい表情を作る。

「彼を・・・」

ジェイドが彼について調べたいという事を伝えるその次の瞬間。

「ッっ!」

アルがサラと繋いでいた手を離し、頭を抑えながら膝をついた。

「お・・・おにいちゃん・・・?」

次に胸を押さえる・・・

「ぐっ・・・ だっ・・・だいじょうぶだっ・・・ 心配は・・・

い．．．．．よっ．．．．．」

そのまま地面に倒れこむ．．．

「お．．．に．．．ちゃん．．．？おにいちゃん！！　だっ　だれ
か！おにいちゃんをたすけてええ！！！」

サラの叫び声で皆が集まってきた。

「「「アル！！」「」「」

なんだ．．．これ．．．

あれ？？．．．．．なんでサラ．．．泣いてるの．．．？

あれ？？．．．．．皆も．．．．．なんでそんな表情を．．．．．？

あれ？？．．．．．体がうご．．．．．かない．．．．．

《まだ．．．早すぎたか．．．．．？》

あれ．．．．．この声は．．．．．

あの時の．．．声．．．

《時が来るまで．．．　休むがいい．．．．．運命の歯車は動き出し
た．．．》

運．．．命．．．？

《体は全く動かせないだろうが．．．見えるだろう？》

見たものは．．．先ほど共に戦ってくれた男と．．．小さな女の子と男の子．．．

サラよりは歳は上かな．．．？

《目覚めたら．．．その者らについて行くがいい．．．》

まって．．．まってくれ．．．お前は．．．一体．．．

だめだ．．．いしきが．．．

《．．．．．それも含め．．．．．いずれは明らかになる．．．．．聖なる焰．．．．．と共に．．．．．を解放せよ．．．．．》

また．．．声が．．．遠のいて．．．いや．．．オ．．．レ．．．の．．．い．．．し．．．き．．．が．．．

．．．．．
．．．．．
．．．．．

オレの意識はそこで遠のいて行つた．．．

#11 薄れゆく意識（後書き）

ありがとうございました！！！

#12 マルクト軍艦タルタロス（前書き）

よろしく願います!!

#12 マルクト軍艦タルタロス

3週間後・・・

ここはマルクト軍の軍艦タルタロス。

「ん・・・あ・・・あれ？・・・ここは？」

見上げると・・・そこは知らない所の天井だった。

「は・・・はは・・・オレこんなの多いな・・・目が覚めたらどこか・・・わかんないって言うの・・・」

苦笑しながら 上半身を起こした。

「とりあえず・・・生きてる・・・な。妙な声が又聞えてきたけど・・・でも、何だろうここ・・・あれ・・・窓の外が動いてるし・・・乗り物の中・・・かな？」

あたりを見渡すと誰一人おらず・・・そこは清潔感がある医療器具らしき器具が沢山ある部屋だった。

おそらく・・・というか 100%医療室か何かだろう・・・

「状況が・・・あまり掴めないけど・・・ とりあえず人は探そう・・・ 何とか体は動けるみたいだし。」

そう言い、立ち上がろうとすると、

ガチャツ・・・

ドアが開いた。

「あ!！」

そこには髪が緑色でちょっと中性的な顔立ちの男の子(?)と人形を背負った女の子がいた・・・

(あれ・・・ 見たことある・・・な・・・)

って考えていると。

「おーーーーきたーーーー!!！」

女の子の方が突然大声を上げた。

キーーーーーン!!

「うわぁ!! 耳がぁぁぁ!!!!」

横にいた男の子の方は笑顔で、耳を塞いでいた。

「ははは・・・ どうもすみません。 目が覚めてくれてよかったです。 体は・・・ 大丈夫ですか?」

男の子が笑いながら話しかけてきた。

「あ・・・ ははは・・・ 耳以外は・・・ 何とか・・・」

苦笑しながら答える。

「ははは、そうですね。 アニス!! 突然そんな大声を上げちゃダメじゃないですか。」

「だーっってーっ やつと目が覚めてくれたんですもん! イオン様も気持ちわかるでしょ?」

どうやら2人は 女の子のほうがアニスで 男の子の方がイオンと言っらしい。

楽しそうに言い合いをしていた。

「あははは・・・お楽しみのところ申し訳ありませんが・・・ここはいいたい・・・それにオレ・・・どうなったんですか？」

聞くとやつと返事が返ってきた。

「ああ・・・すみません・・・ 貴方はアクセリユスで魔物を討伐した後、倒れてしまったんです。 とりあえず町では十分な医療を受けられないのでセントビナーまで貴方を運びました。 といったも運んだのは僕じゃありませんが・・・」

苦笑しながらさらに続けた。

「とりあえず、命には別状はなかったのですが、意識が戻らない原因がつかめないらしく・・・ これ以上何も出来ないといわれましてね。 で、それならばタルタロスの医療器具で十分と言うわけで、ここで治療の方を続けていました。」

説明が終わり・・・

えーっと。

「・・・なんで船の上の医療室で？ そのまま病院の方が良かったのでは？？」

患者を移動させながら治療するよりは大きな病院で安静の方がいいのは当たり前・・・常識だと思う・・・

この部屋は比較的静かで振動はないのだが・・・

乗り物の上なのはかなり不安・・・

まあもう起きたからいけど・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・

いいのか？？

「あははは・・・ 僕もそういったんですけど・・・」

また苦笑していた。

「大佐があなたにどーしても話を聴きたいって言うて聞かなくてさ！ 町ではあらかた聞いたみたいだね。タルタロスの設備は並じゃないから安心してよ。ってか無事だったしい！」

アニスがケロリンつつとしながら話す。

「あ・・・いやっ・・・もう・・・いいや・・・ それで。」

この子に何言っても多分ケロツつと回避されそうだったからとりあえず何も突っ込まないようにした。

間違いないのは命の恩人には変わりないし。

「ああ！！そうだ！アクゼリユスのみんな・・・」

「大丈夫です。」

最後まで言う前にイオンが話した。

「町ならば大丈夫です。魔物はあの後も現れましたが、マルクト軍の方たちが、撃退し以前の静かさに戻っているという報告もあったそうです。」

そう聞いて・・・とりあえずほっとした。

「じゃあ・・・皆大丈夫・・・なんだな・・・？」

「はい・・・ただ・・・」

そこでイオンの顔が曇る。

「障気が・・・坑道より出てくる量が増えたらしく・・・完全に安全とは言い切れません。」

「え・・・そんな！じゃあ町の皆は？？」

あわてて起き上がりイオンの肩を掴む。

「あー！ちよつと！！」

アニスが割って入ろうとするが、

「アニス！良いんです。アクセリウスはマルクト・キムラスカの両国の国境にあります・・・現在・・・マルクト帝国の領土となっています、しかし町への街道が障気の影響で進むことが出来ないのです。それによりマルクト側から手は出せません。」

イオンが続ける。

「なので・・・これからキムラスカに行き、ピオニー陛下の和平新書をお届けなのです。これが出来れば、キムラスカ側へ救援を求める事も出来ます。」

一通りを説明してもらった。

両国が険悪な状況に有るのはサラとの勉強会の時、調べたばかりだった為、割と早く理解できた。

だが・・・

「なるほど・・・しかし・・・ 両国の睨みあいがそう簡単に・・・ 終結するでしょうか・・・？」

不安の顔を隠せず・・・呟いた。

「大丈夫！だってイオン様がいるから！」

アニスが高らかに宣言！

「???」

そう言われても・・・と言う表情をすると。

「あつ・・・ アンタ！イオン様の事・・・知らないの!!」

こいつ・・・頭大丈夫か!!??って感じの表情で言われた。

「うつ・・・ うん・・・ そう言えば君達の名前しか知らないし。」

そう言うとアニスがあきれたように話す、

「導師イオンの名前くらい知ってるでしょー!!」

アニスが突っかかるように言ってくるが・・・

「アニス！」

それはイオンにより阻止された。

「すみません・・・ アニスの非礼をお詫びします。町の人たちに聞きました。貴方は記憶が無いのでしょうか？ わたしの事を知らないのは当然なんですよアニス。」

イオンはアルとアニスを見ながら話した。

「あ・・・そーだったんだ。 ごめん・・・」

アニスは素直に謝った。

が・・・ アルから返ってきた言葉は意外な言葉だった。

「いえ・・・ イ・・・オン・・・？ ローレイ教団の・・・
トップ 導師イオン！・・・ 貴方がそうだったのですか？」

「「え！」」

2人は驚いた。

記憶が無いと言っていたのに・・・

「もしかして・・・ 記憶が戻ってたのですか？」

イオンが尋ねた。

「いえ・・・ アクゼリユスに滞在してた時。勉強しましたからいろいろと、だから・・・完璧・・・とまではいきませんが、ある程度はわかります。さすがに容姿まで知らなかったもので・・・」

苦笑しながら頭を掻く。

「へえ・・・ 貴方は凄い人ですね・・・」

イオンが尊敬するような眼差しで見る。

「凄い・・・ですか？オレが」

「ええ・・・ 自分が誰かもわからないという、苦悩・・・孤独感
は尋常じゃなかったと思います。 それでも 貴方は前を向き行動
しているように感じます。それは並大抵の事じゃ出来ない事ですよ。」

イオンはそう続けた。

さすがにここまでストレートに言われたら照れる。

「いえ・・・ オレが目を覚ましたところが良かったからだと思えますがね。あの町の人たちと一緒だったからこそ 頑張れたんだと思います。辛くなかったといえばうそになりますが、あの町で生活を共にして、オレは一人じゃないって思えたんです。」

少し照れながら・・・ 笑顔で話した。

アニスもイオンも感心しっぱなしといった感じだ。

記憶が無いという事はそれほど大変なのだろう。

当事者なのに実感が湧かないのは、孤独など感じない・・・ 満たされていた環境だったからと思いたい。

・・・ いや、そのはず・・・ だな。

#12 マルクト軍艦タルタロス（後書き）

そろりそろりと原作へ入っていつています〜!!
ありがとうございます！

#13 漆黒の翼を追いかけて（前書き）

出てきました漆黒の翼〜 と言っても殆ど名前だけですが・・・
苦笑

分かる方は分かりますね〜
アビス主人公さん達にそろそろ会えます！

原作突入だあーい！

よろしくお願いします！！

#13 漆黒の翼を追いかけて

暫く3人でいろいろ話していると・・・

ガチャ・・・

男が入ってきた。

「やあ 目が覚めたんですか。それは良かったですね。」

「あ・・・ 貴方は確か・・・」

顔には見覚えがある。

確か、あの魔物ゴレムと戦ってる時、加勢してくれた人だ。

「ああ、自己紹介がまだでしたね。申し送れました。私はマルクト帝国軍第三師団所属ジェイド・カーティス大佐です。」

「あの時・・・オレを助けてくれた人ですね。あの時はどうもありがとうございました。オレはアル・・・と言います。性の方はまだ・・・わからなくて・・・」

ジェイドもアルに記憶が無い事は先ほどの会話を聞いていてわかっ

ていたようだ。

・・・盗み聞きとは感心しないな。

顔に若干出てたらしいのでアニスに察っしられ　あまり気にすると
きりがないと諭された。

「まあ　立ち話もなんですから、ブリッジの方へ行きましょう。本
来なら、客室に・・・とも思いましたが、貴方の事も早めに聞いて
置きたい事がありますし、それに漆黒の翼が出たという先ほど報告
がありましたので」

漆黒の翼が何なのかは知らないが、

仕事を優先した方がいいんじゃないかな？

まあ特に断る理由は無いので、ブリッジの方へ付いていった。

無関係者がブリッジに入ってもいいのかなぁ・・・

「漆黒の翼はどうなってますか？」

ブリッジに入り、この軍艦を操縦してるであろう団員に声を掛けて
いた。

「はっ！視認は出来ました。奴らはローテルロー橋の方角へ逃走中
です。」

「なるほど・・・キムラスカ王国へ逃げるつもりですか。それは少々厄介です。できれば、その前に捕らえたいものですね。」

メガネを指で上げながら呟く。

何やらとんでもないところに来てしまったようだ・・・

ブリッジに入る前から、この軍艦がかなり揺れていたため、その漆黒の翼とやらを追いかけているのは想像できた。

で、その漆黒の翼はこの辺りでは有名な盗賊らしい・・・

つい数週間前まではのほほんと・・・ほのぼのと生活してたのに・・・

魔物に襲われてからなんか方向性が・・・

ちょっと悲観的になっちゃったが、アクゼリウスを救うには、中立であるローレイ教団のイオンの力がどうしても必要だろう。

それくらいならわかる。

例え争いが続いたとしても・・・

一時休戦になる可能性が高い。

そうなれば、アクゼリウスを救えるかもしれない・・・

ならば、できる事は何でもしよう。

何やらここの師団長殿は自分を気に入ってるらしい（迷惑だが・・・苦笑）。

何故なのかはわからないが、この幸運を活かすようにしよう。

そう考えていた。

考えモードから、戻ってくると・・・

タルタロスの進路上に辻馬車がいた・・・

見えた！！

・・・・・・・・・・・・・・・・・・轢かれる！！！！

「その辻馬車道を空けなさい！！巻き込まれますよ！！」

ジェイドのお陰でとうにか 道端の潰れた蛙的な事にならなくてすんだ・・・

ほっとしていたのもつかの間・・・

「ジェイド師団長！！敵は橋を渡り終え爆薬を放出しています！！」

一人の団員が叫ぶ・・・

「ええええ！！」

さつきからずっと頭の中で考えていたのだが、さすがに声が出てしまった・・・ビビった・・・のだ。

「大丈夫ですから 落ち着いて・・・ しまあ 橋を落とす
て逃げるつもりですか。」

ジェイドがそういったと同時にそれは来た。

「フォンスロットの起動が確認できました！！ 敵、フィスフォニム第五音素による
譜術を発動しています。」

・・・たしか第五つて・・・火の音素だっけ・・・ 火薬に火・・・

「爆発する！！」

また叫んでしまった・・・

「はい。そうです。よく勉強していたみたいですね まあそれはともかく
タルタロスを緊急停止！譜術障壁起動！」

「了解！！タルタロス緊急停止！譜術障壁起動！！ 橋が爆発します！！」

ズガアアアアアン！！！！

大爆発が起きた。

そして橋は無残にも崩れ落ちてしまった。

もうあちらにはこの橋を使ってでは行けないだろう・・・

あんな爆発が起きたというのに・・・ジェイドは淡白にこなしていた。

「はぁ・・・これが軍人か・・・凄いですね・・・」

手腕・・・冷静さなどその他もろもろを見て実際に感じた事が声に出た。

「アルー　大佐はね・・・ちょーっと他の人と違うから。あんまほめても意味無いと思うよー！」

横にいたアニスが、意地悪そうな顔をしながら笑う。

「え・・・そうなんだ・・・」

驚きながら言うつと。

「いやぁ　アニスには言われたくありませんねー」

「ふふふ・・・」

ジェイドがすかさず反論　イオンも笑っていた。

「えー　なんでー！　イオン様も笑いすぎー！」

「ははは・・・」

オレもつられて苦笑してしまった。

ジェイドとアニス・・・

この2人は直ぐには掴みにくい性格だな・・・

アニスの方は裏表が激しそうだ・・・

正直な感想です・・・

「また逃がしてしまいましたね・・・　おまけに陸路でキムラスカへ行くのは難しくなりました・・・　まあとりあえず　ひとまず撤退しましょう。」

そう言うところ一行はエンゲーブへ行くことになった。

エンゲーブってどんなところだろう・・・

アクゼリユスしか知らない身とすれば・・・

少し楽しみでもあった。

13 漆黒の翼を追いかけて（後書き）

ありがとうございました！！

#14 食料の村 エンゲープ（前書き）

・・・いきなり店先の食料に手を出していたのはさすがにどうかと
思いましたね・・・ 苦笑

よろしくお願いします!!

#14 食料の村 エンゲープ

エンゲープに付くと、ジェイドは何やら村長さんと話があるようで、そちらの方へ向かった。

「イオン・・・様も行くんですか？」

一緒に来ていたイオンに話しかけた。

あれ？アニスいない・・・

「イオンでいいですよ。私もアルと呼びますから。私は少し気になる事があるので食料庫を調べに行こうと思ってます。」

「ああ・・・どうもありがとうイオン！ 食料庫・・・ああさつき町の人達が話していた食料泥棒のことですか・・・ オレも付いていきますよ。いいですか？」

呼び捨てを許してくれたイオンに感謝した。

教団のトップってちょっと頭が固いのかと思ったけど・・・

イオンはそんな感じが全然しない。

だからこそ、人望があるのだろう。

「手伝ってくれるのですか？ありがとうございます。アルは優しいですね。」

満面の笑みだ・・・

「アニスがいないみたいですし、護衛は・・・こんなのかな場所じゃ要らないとは思いますが、万が一もありますし・・・」

テレを隠しながら話す。

イオンも察してくれたようだ。

笑っていた。

後聞くとところによると・・・アニスとはしょっちゅう離れるらしい・・・

故意なのか天然なのか・・・

恐らくは後者だろうな・・・

そんな風に考えていた。

村の食料子に來てみると・・・

「あああ・・・こりゃ酷い・・・相当な空腹だったのかね・・・」

見たのは、見事に荒されていた食料庫だった。

まあ・・・殆ど残ってないや・・・根こそぎ盗られている。

この村の主力製品は食料。

何よりも価値のあるものだということだ。

何やら村が殺気立っているのはそのせいだろう・・・

「これは・・・・・・・・」

イオンは食料庫の中で何かを見つけたらしく。

その場にしゃがみこんだ。

「何かあったの？」

「・・・ええ これで犯人がハッキリしました。」

そう言うと、イオンは何か動物の体毛のような物を見せた。

「・・・んつと・・・さすがにわからないか・・・もうちつと勉強したらよかった・・・生き物系も・・・」

頭を捻りながら考えるがわからない・・・

「あああ！ごめんなさい。アル！これはですね聖獣 チーグルの抜け毛です。」

イオンは説明してくれた。

「謝らなくてもいいですよ。事実ですから、変に気を使わせるのもちよっと申し訳ありませんし、」

笑いながら話す。

イオンもわるそうにしていたが・・・最後は笑っていた。

「そういえば・・・チーグルってあの・・・えーっと ユリアと並んで教団の象徴になってる草食獣・・・でしたよね？」

確認するように尋ねた。

「はい。その通りです！」

「ん・・・ 何で草食獣の彼らが・・・ うーむ・・・」

腕を組みながら考える・・・

わかんないけど・・・

「とりあえず、村長さんの所に報告しに行きましょう。」

「そうですね。」

そういうと、村長の屋敷の方へ向かった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・

着いたのはいいけど・・・

「何やら騒がしくないかな・・・？」

「そうですね・・・穏やかではありません・・・」

それはそうだ、

建物の中から「大人しくしろっ！！ この泥棒め！」やら「こいつ漆黒の翼なんじゃね？？」とか聞えてくる・・・その後は「ちげー！ーよ！！何でオレがんなことすんだよ！！！！」・・・とメチャ大声で、

「早く言って誤解を解いてあげましょう！」

イオンはそういうが・・・

「ん・・・ 店先での泥棒だったら 庇えないですよ？」

オレたちがわかってるのは食糧庫の犯人だし・・・

「まあそうですが・・・ とりあえず入りましょう。」

「はあ・・・そうですね。」

このドンちゃん騒ぎの中に入るのは気が引けるけど仕方ない。

扉を開けようとする．．．

「ティアさんが．．． 彼らは漆黒の翼じゃ．．． 先ほど．．． 逃走．．． 私が保証します．．．」

ジェイドの声が聞えてきた。

それに 騒ぎも静かになっていた。

「丁度良かった．．． 今のうちに入りましょう。アル！」

「そうだね。」

扉を開ける．．．

「それに 食料泥棒じゃなさそうですね」

皆がこちらを注目した。

「アル、イオン様。」

イオンはそのまま村長の方へ行き、先ほど見つけたチーグルの抜け毛を渡した。

「少し気になったので、彼と調べていたら部屋の隅で見つけました。」

「これは．．．チーグルの抜け毛だねえ！」

それを見た村長も犯人を確定したようだ。

イオンはそれを確信し、

「ええ・・・恐らくはチーグルが犯人でしょう・・・」

「何か解せない点もありますが・・・ね」

イオンとアルで話を繋げた。

その時、

「ほら見ろ！！！！ だから言ったじゃねーか！！！！」

赤毛の長髪の男が騒ぎ出した。

どうやら彼が犯人扱いされていたのであろう。

村の人たちは謝罪していた。

「ふう、一件落着のようですね。」

ジェイドは笑いながら言っていた。

「根本的な解決にはなっていないと思うが・・・」

アルはジェイドに突っ込む。

「おやおや 貴方は優しいですね。いろいろとしなければならぬ

事があるんですが・・・」

「まあ・・・ オレが連れてきてもらった理由もアバウトだし、ア
クゼリユスを助けるためには貴方方といた方が良いでしょうが・・・
やっぱり見過ごせないというか・・・」

少し暗い顔をしながら言った。

「ありがとうございます。アル。」

イオンが礼を言った。

イオンもチーグルと村について心配していたみたいだ。

イオンも言おうとしたが、アルが先に言ったのだ。

「ええつと・・・ 何の礼です？」

アルはそんな事はわからない為疑問を言ったが。

ジェイドは分かっているみたいだ。

やれやれといった感じで苦笑していた。

イオンもにこやかに笑っていた。

「はあ・・・」

わかんないよ・・・

ため息をつくしかなかった。

「まあそれはさておき、とりあえず用事の方は終わりました。本日は遅いですし・・・この村で1泊させてもらいましょう。・・・貴方にも聞きたい事がありますし。」

そう言うつと、村長さんに案内された。

どうやら宿屋じゃなく唯で部屋を使わせてくれるらしい。

そこにアニスも乱入してきた。

またまたイオンと楽しそうにもめていた・・・

それにしても・・・見ていて飽きない・・・な・・・

そんな風を感じていた。

#14 食料の村 エンゲープ（後書き）

ありがとうございました！

#15 ジェイドの疑念（前書き）

短いです・・・切れなかったのー・・・

#15 ジェイドの疑念

その日の夜・・・

「単刀直入に聞きましょう。貴方は記憶が無いといっていました、ならばあの譜術は一体何なのですか？」

ジェイドは昼間の時と違い若干目を鋭くさせ聞いてきた。

「ええ・・・つと・・・何！って言われてもオレには記憶が・・・」

突然雰囲気が変わったため ちよつと引きながら言うが・・・

「おかしいですね・・・ あれ程の譜術が記載されている教本はありません。なのに貴方は完全に使いこなしていましたよ？ 単に勉強だけでは到底身に付けられません。数週間の期間となれば尚更です。」

疑いの眼差しで見られながら言う・・・

イオンも少し庇ってくれてるみたいだけど・・・

（正直に言うか・・・ 信じてくれるかどうかはわかんないけど・・・）

これまでの事を、2人に話した。(アニスは女性なんで別部屋です！)

頭に響く「声」の存在・・・

そして、力を与えたのはその「声」のせいだという事を・・・

2人は暫く黙っていたが・・・

「俄かには信じがたい話ですが・・・ 嘘を言っているようにも思えません。貴方についてはいろいろと調べては見ましたが・・・ やはり何も分かりませんでした。」

「そうですね・・・ 僕も彼は・・・ アルは嘘をついているようには見えません・・・」

よかった・・・

2人とも信じてくれた・・・

普通なら信じられないような事なのにな・・・

オレは心の中からほっとしていた。

ジェイドは・・・

「(過去が無い・・・ まさかとは思いますが・・・ 同位体複写技」

フォミクリ

術・・・？あれは、生物に対しては禁止されてる禁忌の術のはずです！いえ・・・　まだ決め付けるわけには、彼と瓜二つの人物でもいたら・・・　その線もありますが・・・）

難しそうな顔をして考え込んでいた。

「ん・・・？　何か不満だったか？　ジェイド。」

少し不安になったため聞いてみたが。

「いえ、少し考え事をしていただけです。　貴方の事は町の・・・　アクゼリユスの人たちに頼まりましたからね・・・　しっかり面倒を見ないと。」

笑いながら・・・言われた・・・

面倒って・・・　子供じゃないんだけどな・・・

まあ　知識は殆ど無いに等しいけど・・・

いや・・・結構覚えてると思うんだけどなあ・・・

実際に見た事無い物もたくさんあるけど・・・

「それに僕は貴方の言う「声」が気になりますね・・・　聖なる焰・・・　そして解放・・・」

なにやら難しい表情をしてイオンは考え込んでいた。

「ひょっとして・・・意味がわかるのか？」

イオンの表情からそう思い聞いてみたが。

「いえ・・・ ちょっと確信がもてないんです・・・ すみません・・・」

話しちゃ不味い事なのかな・・・？

とりあえず、

「確信がもてれば・・・ よろしく頼むよ。」

イオンはアルの表情から、気を遣わさせてると感じた。

「すみません・・・ わかりました。」

「うん。期待してるから。」

そしてジェイドから、

「まあ、確信がもてない事を無闇に話しても混乱するだけの可能性がありますからね。 その方がいいですよアル。」

はっはっはーって感じた・・・

こいつは・・・ 何か知ってるみたいだな・・・

まあ ジトーっと見てたけど

かるーくいなされた。

その日の話しはそこまです．．． 終了した。

#15 ジェイドの疑念（後書き）

ありがとうございました！

#16 チーグルの森（前書き）

よろしくお願いします!!

はい！原作に突入してからの戦闘です！

・ ・ ・ ・ ・ イオンはどうやって1人で森にきたんですかね ・ ・ ・
・ 1人で行かす分けないと思うんですが ・ ・ ・ とりあえず抜
け出た！ツてことにしました!!

駄文ですがよろしくです！

#16 チーグルの森

次の日・・・

何やらイオンがない・・・

ジェイドも朝早くに何処かへと行ってしまった。

とりあえずは村を出ないように、と言われて。

イオンがいなくなった事は 知らないみたいだ。

と言うかアニスもないし・・・

「まあ・・・ 大体どこにいったかは想像がつくけど・・・」

オレは、部屋を出ると村長さんを探した。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「なるほど・・・ この村から北の森林地帯がチーグルの森なんで

すね・・・ ありがとうございます。」

村長は明るい笑顔でいーよいーよと言ってくれた。

この村・・・最初は騒がしいイメージだったが・・・（まあ事情が事情だし・・・苦笑）

村のトップ・・・すなわち村長さんがとても暖かい感じの人だ・・・

それだけでもいいところだなあと感じた。

そして、オレは少し準備をし、チーグルの森へと向かった。

イオンは十中八九そこに言ったと思われる。

なぜなら ずっとチーグルの窃盗事件に納得がいていなかったからだ。

チーグルは魔物の中でも賢くて大人しい・・・人の食べ物を盗むなんておかしいと・・・

「ふう・・・・・・・・一言いつてくれれば良かったのに・・・」

アニスの苦労が少しわかったような気がした・・・

「とりあえず・・・ 出発の前に一通り準備していくか・・・」

アルはそう呟くと、村の道具屋まで行き・・・

とりあえず、アップル、オレンジグミ・・・などのサバイバル用品

？を購入し森へと向かった。

場所は変わり・・・

ここはエンゲーブより北部に位置する森。

【チーグルの森】

まあ第一声は・・・

「すっごいデカイ森だな・・・ これじゃあ探すのかなり骨が折れ
そうだ・・・」

森の大きさに驚きながら・・・

時折襲ってくる魔物を退けながら、奥の方を探索した。

探索していると・・・

声が聞えてきた。

女の人と男の人の声・・・

3人の声だ。中には聞き覚えのある声・・・と言いかイオンの声だった！

アルは声がするほうへと向かった。

イオン side

イオンは魔物を退ける事に成功したが・・・

足元がふらついていた為、ティアがイオンを支えた。

「大丈夫です・・・少し ダクト式譜術を使いすぎただけで・・・あなた方は 確か昨日エンゲーブにいらした？」

イオンは少し立ち眩みをしながら、話した。

「オレはルークだ」

「私は神託の盾騎士団 オラクル 大詠師モース旗下 情報部 第一小隊所属・・・ティア・グランツ響長であります イオン様。」

それぞれが挨拶をした。

中でもイオンはティアの事は知っていたらしい、

「ああ！あなたがヴァンの妹ですね！噂には聞いていました。お会いするのは初めてですね。」

話していると突然ルークが騒ぎ出した、

「ハア！！！？お前が師匠せんせいの妹？？ それに神託オラクルの盾の人間？？
じゃああなんで師匠せんせいの命を狙うんだよ！？」

ティアに掴みかかりながら問い詰めていた、

「命を………？」

穏やかな話ではない。

イオンは 心配そうにティアの方を見た。

その視線を感じたティアは、

「いえ…… こちらの話しで……」

話しくそうに口を閉じた。

だが ルークはまだ納得できず暫く騒いでいた。

そのためか……

背後から近付く魔物に気がつかなかった。

ガアアアアアッ！！！！

「しまった！！」

ティアが真っ先に気付いたが、それでも遅すぎた。

もう魔物はイオンの側まで来ていた。

イオンは突然の事に、目を瞑ってしまった。

「イオン様！！」

その時、

ガキイイイイン！！

イオンの周辺に障壁のようなものが現れ、彼を守った。

s i d e o u t

「危ない……間一髪……だ。良かった……」

イオンを守ったもの・・・

それはアルが放った防護障壁だった。

そばまで行つてみると、またまた彼らは騒いでいた。

村で見たときと同様に・・・

その後ろで、ウルフが近付いているのが見えた。

3人は気付いてない様子だった。

撃退するには距離がまだかなりあったので、防護の力の譜術を使用したのだ。

まだ、状況が分かってなかったイオンの側まできて、

「だいじょうぶ？」

肩に手を置きながら言う。

イオンは驚いていたが、それがアルと分かると表情を和らげ、

「アル！ありがとうございます。」

礼を言った。

「言いたい事はあるけど・・・とりあえずは、こいつらを片付けてからだ。」

魔物に向きなおす。

「君達も・・・戦力として考えていいのか？」

側にいた2人に言った。

「・・・ええ！　もちろん！」

「ツたりめーだ！こいつらよくもビビらせやがって！-！」

「よし、OK！」

ルークが前衛、ティアが後衛、そしてアルは前衛後衛どこでもいいける、

アルが使用するのは、己の拳、

そこに譜術によって、威力を高めたり　属性を付与したりする・・・

ルークが剣、そしてティアがナイフ、術様の杖、

陣形としては理想的だ。

3人で、魔物の群れを撃退する事に成功した。

アル side

……うん。

何人かいてくれるととても戦闘が楽になるな……

詠唱に専念できるし…… 隙を突いて接近戦もしやすくなる

この女の人は治癒の力も使えるみたいだし……

男の人の方は荒削りな感じはするけど、剣術の心得は持っているみたいだし……

こんな整ったパーティは初めてだなあ……

そう考えていた。

side out

#16 チーゲルの森（後書き）

ありがとうございました！

#17 チーゲルの森・遭遇（前書き）

よろしくです！

#17 チーグルの森・遭遇

戦闘も終わり・・・

ウルフ達を一掃し イオンのそばまで来た。

「イオン！危ないじゃないか・・・ 行くならせめて、オレに声を掛けてくれればよかったのに。」

「すみません・・・ どうしても早く真実を知りたかったので・・・」

やれやれ・・・

やっぱり 思ってた通り・・・

イオンの性格ならそうなるはな・・・

「おいおい、あんま ネチネチと苛めるなよ。 無事だったんだから許してやれよ。」

「ちょっと！ルーク！！無事だったのは彼が助けくれたおかげでしょう！！！」

ああ・・・横から見ると苛めているように感じたのか・・・

それにしてもこの2人はしょっちゅう言い争ってるような・・・

喧嘩するほど仲がいいってことかな？

「あはは・・・ 苛めてたわけじゃないんだけどな。 まあいいさ、君の言うとおり無事だったんだし、」

とりあえず 表情を緩めた、

「そーいやあ イオンはこんなどこに何しに来たんだ？ 後お前も。」

暫く森を歩いて・・・

ルークが聞いた。

「あ・・・はい 実は盗難事件が気になって・・・ チーグルが人間の食べ物を盗むなんておかしいんです・・・それで、」

「やっぱり・・・予想的中。 オレはイオンを追いかけてね。 後オレの名前はアルっていうんだ。 よろしく。」

一通り自己紹介とここに来た理由を説明した。

彼も自己紹介をしてくれた。

夫婦かな？つて聞いたらスッゴい勢いで拒否。

なんか・・・絡み具合が面白いな。

いつか夫婦になったりして・・・な・・・

で、話は変わり。

「フーン だったら目的は一緒ってワケか」

「えっ・・・ではお2人も？」

イオンは少し驚きながら話した。

そして ルークは・・・

「しかたねーな おまえらもついてこいや。」

一緒に行く事を示唆した。

しかし・・・ティアは反対した。

「何を言うの！イオン様を危険なところへお連れするなんて！！
あなたもそう思うでしょう？」

そこでオレに振るか・・・

「えーっ？帰したってコイツまたのこのこと森に来るだろ　こんな青白い力才でぶっ倒れそんなヤツほっとくわけにもいかねーじゃんか」

（・・・口は悪いけど、彼・・・根は優しい感じがするな・・・）

オレはそう思いながら、

「そうだよな・・・　そもそも黙ってここに来るぐらいだから、このまま帰ってって言っても頑なに拒むと思う・・・真相を明らかにしないとね・・・　何よりチーグルだし・・・ティアさんが言うのも分かるけど、こう言う人なんだイオンって・・・たった数日の付き合いだけど大体理解したよ。」

苦笑しながら話す。

「・・・たった数日・・・？　え？貴方はフォンマスターガーディアン導師守護役じゃなかったのね・・・」

ティアは驚きながら話していた。

まあ・・・昨日はイオンに付きっ切りだったからそうとられても仕方ないか。

「えっとそれは確か・・・女の子の方ですね。オレは違いますよ。あー後・・・」

イオンのほうに向きなおした。

「ムリをしたらダメだ。イオンは体はよくないらしいじゃないか。

彼ら・・・協力してくれるみたいだし、ここは任せて・・・な。」

とりあえず、誤解を解き、イオンに伝えた。

そしていろいろ話しているとイオンが喜びながら。

「あ・・・ありがとうございます！ アル！ それにルーク殿は優しい方なんですネ！！」

満面の笑みでそう答えた。

「「は？」」

・・・？

「え？なんでそこで「？」が出るの？お礼を言われてるのにさ・・・？」

突っ込むと、

「だ だ 誰が優しいだア！！ アホな事言っでないで大人しく着いてくりゃいいんだよ！！！！」

またまた騒ぎ出した・・・

これが所謂ツンデレだな。

その上ルークはイオンはムリすると言ったら、

更に感激されて またまたテレ騒ぎしていた。

「面白い人なんだね・・・ ルークって・・・」

ティアに話しかける。

「彼・・・真正銘の箱入りだったらしくてね、こんな風に言われる事あまり無かったんじゃないかしら？」

「箱入り・・・？ 彼は貴族の人だったのか・・・」

ふーんとマジマジとルークを見た。

まだ、メチャクチャ照れていたなあ。 笑

「さ・・・ さあ・・・ 私は詳しくは知らないから・・・」

???

あからさまだな・・・ 態度が。

「話したくなければかまいませんよ。 オレはマルクト軍じゃないので、報告したりーとかはしないので。」

何か事情がありそうなんだけど、追求はしない。

興味ないことは無いけどさ。

「ありがとう・・・」

ティアは礼をいい腑と前を見てみると・・・

「あ!!」

「ん??」

みゅっ!!

何かの影が見えた。

「チーグルです!!」

「何イ!？」

イオンが叫ぶと同時にルークも反応、

「逃げたあー!!」

まあ・・・そりゃ逃げるわな・・・

いきなりあんな大声を出すと。

「えーい!!畜生!!とりあえず追うぞ!!」

だー!!!!

っと叫びながら ルークはチーグルの後を追いかけていった。

「ヴァンのこと・・・聞かないほうがいいですか？」

イオンが心配そうにティアを見ながら聞いた。

確か・・・命を狙ってるとか何とか・・・

ルークが騒いでいたので内容は大体把握している・・・

「すみません・・・私の故郷に関わる事です・・・ルークやアル・・・イオン様を巻き込みたくは・・・」

話を・・・聞いていた・・・深い事情があるのだろう・・・

だけど・・・

「ティアさん・・・事情については追求はしないけど・・・血縁者同士で争うなんて・・・悲しい事だと思うよ・・・オレ・・・記憶が無いけど・・・それ位は分かる・・・よ。」

少し表情を暗くし、ティアに言った。

「・・・ありがたく受け取っておくわ・・・だけど、これだけは・・・譲れない思いがあるから・・・それよりも貴方も記憶が無いの？」

ティアは自分の決意の強さをだしたが・・・最終的には一応受け取ってくれたようだ・・・それより・・・

・・・貴方も？

「ん・・・？ひよつとして彼も？」
ルーク

この場にいるメンバーで記憶が無いそぶりを見せている人はいない。
記憶があることに明確なのは、イオンはもちろん、ティアも自身の
故郷の事も言っていたしな、

なら、消去法で行くと・・・

ルークだけになる。

「ええ・・・そうらしいの・・・」

「へえ・・・記憶障害者同士、仲良くできたらいいけどなー」

と言つてアルは笑った。

ティア s i d e

ティアは一瞬余計な事を聞いたと思い謝ったがこれまた笑いながら
「気にしないでいい」と言われた。

イオン様いわく、彼はとても強い心を持つてるとのこと、

記憶が無いというハンデを背負いながらも前を向いて歩いていると・
・

そういう風に言つと ^{アル}彼はあからさまに照れていた。

早くルークを追いかけてよう！と話題をそらしながら・・・ 微笑

イオン様もとてもまっすぐな方だ。

思った事は直ぐ口にする。

もちろん相手を罵るような事ではなく、良い所しか言わない。

これは 良い事なのか・・・ 相手によると思うが悪いことではない・・・

ルークにとつたら おそらく初めて屋敷の外で褒めてくれた人だし。

でも・・・

同じ記憶が無いもの同士でも・・・

ルークは少しアルを見習って欲しい・・・

ティアはそう感じていた

s i d e o u t

#17 チーゲルの森・遭遇（後書き）

ありがとうございました！！

#18 チーグルの森・接触と真相（前書き）

よろしくお願いします!!

やっとこちら更新です

中々難しいですね・・・

何はともあれよろしくお願いします！

#18 チーグルの森・接触と真相

チーグルを追いかけたどり着いたのは・・・

巨大な木がある少し開けた場所だった。

「こん中に入って行っただぞ？」

「チーグルは木の幹を住処としていますから。」

木を見ながらイオンは言う。

というかそれ以前に、

「へえ・・・よく見たらこの辺りにこの森では無い果物が落ちて
る・・・何か印？見たいなのもあるし、これで間違いないよな？」

そう・・・食い散らかしてる感じ？

ちょこちょこ落ちてた。

・ぱつと見、食い散らかしてるーっぽい感じだけど・・・何か違う・・・

「ひょっとして・・・ 食べるのが目的じゃなかったりしたりするかの・・・」

アルは呟く・・・

「ええ・・・そうですねアル。とりあえずチーグルに聞いてみましょう。」

チーグルに聞く？

魔物と？

さすがにそんなことが出来る事は知らなかった為。

若干ポカーンとしていた・・・ 苦笑

まあ入ってみれば分かるか・・・

そしてチーグルの住処と思われる木へ入っていった。

「おまえたち・・・ユリア・ジュエの縁者か？」

声・・・が聞えてきた。

そして大量のチーグルも一緒に・・・

「うわ・・・めちゃくちゃいるな・・・それに人の言葉を話せるん

だ．．．．．」

声に出してしまう．．．

「なんだア こいつら！？ウジャウジャ出てきやがって．．． 魔物の癖に人間の言葉をしゃべってんぞ！？どうなってんだ？？」

ルークも同様のようだった。

そこヘイオンが、

「大丈夫ですよ アル、ルークあればソーサリーリングの力でしよう。」

説明してくれた。

「へえ．．．あれがユリアとの契約で与えられたって言う．．．」

マジマジと見ていると．．．

リングを持っているもチーグルが話しだした。

「左様。このリングはユリア・ジュエとの契約によって与えられたものだ。」

肯定してくれた。

「僕はローレイ教団導師イオンと申します チーグル族の長とお見受けしますが？」

「いかにも・・・」

イオンが長と話していると・・・

「おい魔物！！お前らエンゲーブで食い物盗んだんだろ！」

ルークが割ってはいる。

すると突然の事にみんなが慌てだした・・・

「ルーク、まあ十中八九チーグルたちが犯人だとは思っけどさ、もうちよつと穏便にしようよ。みんな怯えてるよ？」

とりあえずアルがルークをなだめる。

なだめれないと思ったけどね。

「だー！こいつらのせいでオレが泥棒扱いされたんだぞ！！」

やっぱり・・・

「まーまー、とりあえず訳を聞こうよ。幸いな事に言葉は通じるんだしさ。」

「彼の言うとおりよ。ルーク。（・・・・・・・・カワイイ／＼）」

ティアは賛同してくれた。

何やらチラチラとチーグルたちを見てたみたいけど。

「？」

ティアはアルの視線に気付いたようだ

「！！なんでもないわ！！」

そう言っソッポ向いていた・・・苦笑

「チーグルは草食ですね？ 何故人間の食べ物？ この森は緑が豊かなようですし・・・」

あーだこーだ言ってる3人を置いて・・・

イオンが話を進めた。

チーグルの長はその言葉に言葉を詰まらせる・・・

「・・・我らの仲間が・・・北の地で火事を起こしてしまった・・・その結果 北の1帯を住処としていた「ライガ」がこの森へ移動してきたのだ・・・我らをエサとするために！！」

長老の表情は苦痛でいっぱいだった・・・

「では 村の食料を奪ったのは仲間がライガに食べられない為・・・？」

「そうだ・・・定期的に食料を届けぬとヤツらは我らの仲間をさらって喰う・・・」

・・・言葉が見つからなかった。

「それは・・・酷いな・・・いくらなんでも」

アルは暫く言葉が出てこなかったが、出てきた言葉が「酷い」だ。

本来・・・

獣は生きる為に・・・そして家族の為に獲物を狩る。

それが自然な事だ。

だが・・・脅し・・・食料を届けさせる・・・

人と言えば奴隷も同じ・・・

「そう・・・ですね・・・」

イオンも同様だった。

だけど、

「弱いもんが喰われるのは当たり前だろ？ 大体自業自得じゃねーか。」

ルークが言っている事は確かに正しいが・・・

「オレは・・・そればかりは賛成できないなルーク。」

これまで、なだめたり・・・ てきとうに受け流したり・・・ していたアルだったが、

今回は真っ向から反対した。

「あん？なんでだよ！」

「生き物は生き残る為に獲物を狩るそれが自然。だが、ライガと言う魔物は定期的に食料を要求している。それも脅して・・・。そんな人間同士であらわせばそれは奴隷と同じだろう・・・？ オレはそんなのは納得できない。」

アルはキツパリとそう言い切った。

「アル・・・ はい。そうですね・・・ アルの言う事もよく分かります。それにこれが本来の食物連鎖ではありません。」

イオンはアルの意見に賛成のようだ。

ルークはやはり渋っていた。

そこへティアが・・・

「ルーク・・・ 犯人はチーグルと判明したけど この後どうするつもり？」

ルークに聞いた。

「そりゃ 村に突き出して・・・」

「そうしたら今度はエサを求めてライガが村を襲うでしょうね。」

そう・・・なるな。

「えええ！？ あんな村どうなろうと知ったこっちゃねーよ！」

それはいくらなんでもあんまりじゃないか・・・

そう思っただけで言おうとしたが、イオンに止められた。

「エンゲーブは食料の町。そしてその食料は世界中に出荷されています。それでは大変な規模の食糧問題となってしまう。」

イオンは・・・反論できない且つ・・・不快感をルークに与えないように言った。

（イオンありがとな。オレ強く言いそうだったよ。）

小声でイオンに礼を言う。

イオンは軽く頷き笑っていた。

「でもよー じゃあどうすんだ？」

ルークがそう言う。

「ライガと交渉しましょう。」

イオンが言った。

「ライガっていう魔物も話せるんだ・・・」

アルがそう呟くと。

「いいえ、僕らだけじゃ無理ですが チーグル族の誰かに訳してもらえば・・・」

「ああ、なるほど・・・」

納得した。

食料を要求している以上・・・

チーグルとライガはちゃんと言葉が通じてはいるようだ。

納得していると・・・

「では通訳の者にわしのソーサリーリングを貸し与えよう・・・」

長がそう言つと、1匹のチーグルを呼び出した。

ちよこんー!!

っと出てきた子どものチーグル。

「この子どもが北の地で火事を起こした同胞だ。これを連れて行ってくれ」

そう言うつと長の持っていたリングを渡す・・・

すると・・・

「ボクはミユウですの よろしくお願いするですの!-!」

急に喋りだした!-!

リングが合わないのか、動きずらそうにしている・・・

ぼてっ・・・「あう・・・」

転んだ。

「おい!-!なんかむかつくぞ!-!」コイツ!-!」

「ごめんなさいですの!-!ごめんなさいですの!-!」

何か分からんがルークがイラついている・・・

「まーまー・・・」

アルがいつもどおり なだめようとし・・・

イオンは微笑みながら見ていた。

んで、ティアは・・・

「かわいい・・・・・・・・」

またまた顔を赤面させていた。

何はともあれ新しい仲間？と共に

ライガがいると言う祠へと向かった。

#18 チーゲルの森・接触と真相（後書き）

ライガのところは・・・ちょっと考えさせられた内容でしたね・・・

一番はミュウが森を焼いたのが原因なんですがね 苦笑。

でも要求はちょっと・・・ 苦笑

#19 チーグルの森・2人の共通点（前書き）

よろしくお願いします!!

こちらはかなり不定期です。

オマケにべつ小説でも書いてますが・・・

リアル（現実）がヤバ忙しいんです・・・

逃避したい・・・なあ・・・宝くじに願いを・・・

では！

#19 チーグルの森・2人の共通点

ライガと交渉する為に森の奥へと向かっていた。

「ルーク!! 後ろ!」

その場所が近付いたのか

複数のライガが姿を現した。

「うおおっ!!」

「みゅううう!!」

ミュウは大慌て!

おまけにルークも 苦笑

「落ち着いて対処なさい!」

ティアが激を飛ばし譜術にはいろつとするが・・・

ガアアッ!!

複数のうちの二匹が襲い掛かる！

「くっ・・・素早いわね!!」

杖で何とか攻撃は防いでいた。

「任せて!! 我が元へと集え 邪の化身・ブラッディ・レイド！」

アルが放つ暗黒波動でライガ達の動きを封じた。

「うおおおお!! 双牙斬!!」

ザシュ!!

その内の一匹をルークが、

「ノクターナルライト!!」

ザシュシュ!!

投げナイフでティアが攻撃し、

「よっしゃ！来い！光の眷属、ルナディ・ストリーク！」

闇の波動を一気に反転さし光の攻撃で一掃する。

闇の攻撃で耐性が付く可能性があるため、こついつた反転譜術はより効果的になるらしい。

つと、何かの教科書に書いてました！！ 苦笑

ライガ達をとりあえず戦闘不能に。

「ふう・・・ 助かったわ アル。」

「けっ！俺だけで十分だったの。」

「ちょっとルーク！！」

「まあまあ・・・」

勝利の掛け声？

相変わらずだったね・・・

「それにしても・・・貴方の使う譜術は見たこともないもの・・・記憶が無いとっていたけどいったいどうやって身につけたの？」

更に森の奥へ進んでいるとティアがその話題に触れてきた。

「ん・・・ 難しい質問だね。 これは習ったりしたんじゃないんだ。」

「はあ？ 譜術ってのは指南を受けずに修めれるもんなのか？」
ルークも目を開かせて言う。

彼も師匠の元で剣術の指南を受け続けていたからこそ、今の剣術が使えるのだ。

それなのにアルの話からすると 明らかに違和感を感じたのだろう。

「ええつと・・・ ううん・・・」

腕を組み考える・・・

「あ！言いたくなければ無理して言う必要ないわ。 ごめんなさい。」

ティアがそう言う。

そんなつもりじゃなかったんだけどね・・・

イオンは何に悩んでいたのか分かっていたみたいだ。

「アル、彼らは信頼できると思いますし、貴方の言う事も信じてくれると思いますよ。」

そう見つめながら諭してくれた。

そうなのだ。

頭の中で声が聞えて・・・それが力になって・・・

なーんて 夢物語を信じてくれる人なんてそうはいないだろう。

ジエイドのように、裏を調べ 確信がもてないのならまだしも・・・

「え？ それってどういう・・・？」

ティアもキョトンとした表情でこちらを見ていた。

「僕も気になるですよ！！ アルさんの譜術！とってもカッコいいですよ！！」

ミユウはピョンピョン飛び跳ねる！

そうやってると・・・

「うるせー ブタザル！！」

ドカン！

みゅー・・・！！

ほら・・・

「ま・・・まーまー！ ルーク落ち着いて・・・ はあ・・・ そうだね。 信じてくれるかどうかはとりあえずわかんないからおいとい
て・・・あのね。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・

とりあえず 以前ジエイドとイオンに話したこと全てそのままルークとティアにも伝えた。

頭に響く「声」の事・・・

魔物との接触の刹那、それが再び聞こえ出して、力を貸してくれたという事・・・

まあ・・・期待はあまりしてなかったんだけど・・・

驚いたことにルークがこの話しに凄い勢いで聞いてきた。

「お前も！？幻聴が！？それに記憶喪失だって！！」

お前も・・・？

驚いたことに、ルークとは共通点が2つもあつたみたいだ。

特殊な事例なのにそれが2つも・・・

偶然・・・なのか？

「えっと・・・お前もつてことは・・・？」

そうルークに聞くと。

「ああ、俺もたまにな、七年前からだ俺のは、記憶を失ってからっ

てことか？ 夢中だったり突然頭の中だったり・・・」

やれやれといった感じで話していた。

「・・・・・・2人に共通点があり その共通点とは特殊なものです。ただの偶然とは・・・」

イオンも思っていないようだ。

「そうですね・・・私もそう思います。ルークはその事をお医者様には？」

ティアが聞くと。

「そんなもんあったりめーだろ？んで 全員原因不明！記憶が飛んだときのショックが原因とおもわれる！ばっかだしよ！ ちっとも治ってねーし。」

ルークは不満だらけ。

ブツブツ言いながら歩いていた、

「あははは・・・ だよな。 こればかりは中々簡単にはいかな
いと思うな、何せ、人体の中でも一番の難解な場所って言われてい
るところだし、」

脳という器官はまだまだ未知数のところが多い。

血中の音素^{フォニム}がどのように作用しているか・・・等まだまだはっきり
と分かっていないようだ、

名高い教授・研究員が調べている段階らしい。

「ああ？そーなんだ。なんでそんなこと知ってんだよ？お前は。」

「本の知識！」

サラッと言った。

「・・・ルークも少しは見習ったらいと思うわよ？ 彼の方はつい最近から記憶が無いのに知識で大分遅れているじゃない・・・」

ティアは、はあ・・・とため息をつきながら・・・そう言った。

なんで火に油を注ぐような事を・・・

「うるせーな！！余計な世話だ！！」

「ま・・・まあーまあー！」

こうなるんだから・・・

「ケンカしないで下さいですの！！」

もちろん、ミュウの仲介も火に油・・・

「だまつてろ！ブタザル！！」

ドガッ！！

「うみゅううう・・・」

ほらさあ・・・

段々疲れてきた。

「アル？笑ってますよ？」

イオンが側まで来ていて、そう言った。

そうなんだよなあ・・・

「俺は・・・俺にとっては全てが新鮮な事なんだな。つかれたあつて思ったりしてるけど、こういう賑やかなのもいいかもしれないな。アクゼリユスも賑やかだったけどそれ以上だな。こりゃ。」

「あはははは！そうですね。」

暫くイオンと笑いながら、最初の話題を忘れ言い合いになっている2人と1匹を見ていた。

・・・言い合いというか、ルークが一方的に言い、それをティアがサラッとかわす、んでミュウがやってきて・・・ルークが苛めて、ティアが助けて・・・って感じだね。

「はい！賑やかですね。」

「だね！」

笑ってたんだけど・・・

ここに来た理由も頭に残しておいてよ？ 2人とも・・・ 苦笑

#19 チーゲルの森・2人の共通点（後書き）

ありがとうございました！

#20 チーゲルの森・vs ライガ・クイーン（前書き）

よろしく願いします!!

#20 チーゲルの森・vs ライガ・クイーン

その後、何度かライガたちに囲まれたり・・・

他のモンスターに襲われたりしてたけど、

何とか、ミュウの案内に従って、ライガ・クイーンが住処としている祠へと到着した。

「んで、この祠の一番奥にライガのボスがいるんだな？」

「はいですよ！ライガ・クイーンですよ！」

ルークが先頭で入っていく。

「ん？クイーン？」

ルークは分からなかったのか、アルのほうを見るけど・・・

「魔物に関する知識はさっぱり・・・」

お手上げ！っといわんばかりに手を上げる・・・すると。

「ライガはね、強大なメスを中心に郡をなす女王社会なのよ。」

ティアが説明をしてくれた。

「なるほど・・・ なら女王の側近にはかならず無数のライガがいそうだし・・・ 気を引き締めないと・・・」

ぐつと拳を握る。

ティアも無言で頷いた。

「へっ！何でもきやがれってんだ！」

ルークは相変わらずです。

ティアもため息を出していた。

「ミュウ、通訳よろしくお願いしますね？」

イオンが肩に乗っているミュウにそう言う・・・

頼られるのが嬉しいのか満面の笑みで。

「はいですの！ーこの奥ですの！ー！」

と言った。ティアじゃないけどちょっとかわいっておもちゃったな（癒）

でも・・・

そんなほのぼのの感はおへ入った途端一瞬で吹き飛ばす！

グオガアアアアアアアアアア！！！！

入った途端咆哮の熱烈な歓迎？をしてくれたからだ。

ライガ・クイーンとの対峙である。

「うわああ！！？」

ルークも流石に予想以上だったのか、たじろいってしまった。

「威圧感が・・・ほかのライガたちとは比べ物にならない・・・」

アルは警戒を強めながら見ていた。

グルルウルルル・・・

ライガ・クイーンは威嚇しながら、唸りながら目を決してそらさず、こちらを睨みつけていた。

「お・・・おい　ブタザル　なんて言っただ？あいつ」

「えーとですの…… 卵が孵化するところだから来ると言っているですの……」

「なるほど…… 母親なら当然の反応だな。」

「つてか ライガって卵生なのか？」

やり取りをしているとイオンが慌てて、

「まずいです…… 卵が孵れば生まれた仔たちは街を襲います!!」

「へ?」「!!」

アルとルークは驚いていた。

「ライガの子どもは人を好むのよ!」

「何イ!？」

ガアアアア!!

ライガが再び雄たけびを上げた。

それを聞いた途端…… ミュウが怯えだし……

「そ……その前に ボクたちを殺して子どものエサにするって言うてるですの!!」

ガアアアアア!!

「……………」

威圧感がビリビリと伝わってくる。

どうやら本当に自分たちを獲物と見定めたようだ。

「危険だわ…… 町の近くに住むライガは繁殖期前に狩りつくす決まりよ!」

「みゆううう…… ボクがライガさんのおうちをかじにしちゃったからいけないのです……」

ライガ・クイーンが雄たけびを上げる……

すると、何匹かライガたちも集まってきた。

「まずいな…… 仲間……というか兵隊を呼んだか。」

「ど……どーすんだよ!?!」

「ミュウ彼らにこの土地から立ち去るように言ってくれませんか?」

イオンがミュウにそう頼む。

「は・・・はいですの」

ミュウは怖気づきもしたが、勇気を出し、ライガの方へ歩み寄り交渉を始めたが・・・

グルアアアアア！！！！！

「みゅー！！！！」

ライガの咆哮で

すっ飛ばされてしまった。

それをルークがキャッチする！

「みゅー みゅー~~~~~ ありがとうございますのおお」

涙をポロポロ流しながらお礼をいい。

やっぱりそう言うことになれていないルークはテレながら、

「カ・・・カンチガイすんなよ！たまたまだよー！！」

そう言った。 苦笑

ライガ・クイーンはゆらりと立ち上がり・・・身構える。

他のライガたちも同様だ。

「交渉は・・・」「決裂のようね。」

アルとティアは頷きあう。

「我が成すは、堅牢たる絶対領域・・・ 侵すことの出来ない聖域
よ来れ！」

「ミスティック・フィールド！」

パキイイイン・・・

少し後ろに、光の領域を作り出す。

「イオンとミュウはその中へ！ 絶対に出たらダメだぞ！」

「は・・・はい！」

そう言うと、ライガ達を見直す。

「ありがとう、アルこれならイオン様たちは大丈夫ね。」

「礼はまだ早いさ。俺がやられたらあの障壁も消えるんだし、まずはアレを何とかしよう。」

「お・・・おい ここで戦ったら卵が割れちまうんじゃない・・・」

ルークはまだ迷っていた。

「残酷なようだけど　その方が都合よ。」

「このまま　ここで餌になるわけにはいかない　俺にはまだやらなきゃならない事があるから、」

「・・・!」

ガアアアア!!

「来るッ!!!」

「ちつくしょ!!やってやらあ!!!」

ライガ・クイーンはその巨体から考えられないようなスピードで襲い掛かってきた!

#20 チーグルの森・vs ライガ・クイーン（後書き）

おまけ スキットコナッ♪

？ミユウ大好き！と大嫌い！そして仲裁・・・

「っってお前！さっきからピョンピョン みゅうみゅう うぜーんだよー！」

「ごめんなさいですよー！ごめんなさいですよー！」

「ちょっと！ルーク ミユウがかわいそうじゃないー！」

「ま・・・まーまー！2人とも！ルークもミユウをいじめないの・・・」

「だー！こいつがウザいんだって！」

「（こんなにかわいいのに・・・／＼／＼）」

「ティアさん？」

「！！ なんでもないわー！」

「みゅううう・・・」

「（泣いている姿もかわいい・・・）」

「（あれで誤魔化してるつもりなのかなあ・・・？）」

？2人の違い・・・

「アルの譜術・・・やっぱり見事ですな。」

「わたしもそう思うわ。」

「ボクもですよー!!」

「いやいや・・・そこまで面うかって言われると・・・かなり照れるんだけど・・・／＼／＼」

「けっ・・・いきなもんだな!」

「ルークの剣術も凄うと思うよ?ねえ イオン。」

「はい!ルーク殿には助けられてます!」

「ボクも助けられて感激したですよー!!」

「まっ 最初はどくなるかと思ってたけどね、」

「うっ・・・うるせーな!! どーでもいいじゃんかよー!!そんなのー!!!!」

「（2人共通点はあるのに ココまで違う反応だと面白いわね）」

「ははは・・・」

「「?」」

以上

もつと面白いスキットできないかな・・・

小説の流れに沿って出来たらいいですね・・・ 何かアドバイスあればよろしくお願いします!! 苦笑
では!

#21 チーゲルの森・決着（前書き）

けっこうライガ・クイーンは強かった思い出がありますね♪
ジェイドの乱入で一気に逆転しましたが・・・
当時はバランスブレーカーだ！！って思っちゃいました！苦笑
では！

#21 チーグルの森・決着

「深遠へといざなう旋律・・・」

「うおおおお!!!!」

「ナイトメア!」「双牙斬!!!」

ルークとティアが譜術と剣術を同時に入れるが・・・

「!! ルーク はなれろ!」

アルが叫ぶ。

すると砂埃からライガ・クイーンの巨大な腕が出てき、ルークを弾き飛ばした。

ドガアアアア!

「ルーク!!」

ティアはルークに駆け寄る。

「ティアさんはルークを頼む! . . . 熱く滾りし獄炎 . . . 聖なる龍の姿となりて . . . 我が敵を喰らい尽くせ」

アルの周囲が赤く染まっていき . . .

「ドラゴ・フレイム!!」

その次の瞬間、サラマンダー炎龍が飛び出しライガ・クイーンを襲う。

!! ガアアアアア!!

ライガ・クイーンはそれに気付き、炎龍をはらおうとするが、そう簡単には消えない。

が . . .

ガアアアアア!

クイーンが雄たけびを上げたその時、

無数のライガたちが一斉にアルに飛び掛ってきた。

「しまっ!!」

ドガアアア!!

「がはっ!!」

連撃を受けアルもまた吹き飛ぶ。

「アル!!」

ティアも駆け寄って、治癒術を使用した。

「あッ ありがとう・・・ くそ・・・ あの炎龍は俺に攻撃したら消えるってわかったのか? かなり賢いんだな・・・ アイツは。」

傷を拭きながらライガ達をにらみつけた。

「かなりの強さよ・・・! 援護は任せて、近接戦闘は頼んだわ
ルーク! アルは周りのライガをお願い!!」

「お・・・おう!!」

「わかった。あいつらがいたら クイーンに集中できないからな、
兵隊は任せてくれ、直ぐにそっちに行くから。」

そう言い合つと、

ルーク達は一気に飛び出す。

「さあ、お前らの相手は俺だけだ、さっきは不意打ちだったが今回はそうは行かないぞ！」

無数のライガ達はアルのみを標的としていた。

恐らくは女王の指示だろう、それだけ先ほどの譜術を脅威と思ったようだ。

「・・・好都合ッ」

仲間達はこれでクイーンのみに集中できる。

そして それぞれの第2ラウンドが始まった。

ルークは苦戦をしながら、あることを思い出していた。

屋敷にいたときのことだ。

《相手がどんな奴でも やられる前にやっちゃまえばいいじゃんか》

今は・・・かなり押されている・・・

《では 私にも？それが通用するといふのか？》

師匠の言葉が頭をよぎる・・・

（今の俺じゃかなわない・・・ 師匠^{せんせい}・・・！！）

その時、

「やれやれ、見てもらえませんか・・・ 助けてあげましょう。」

声が聞えてきた。

「「！！？」」

「あっ！」

アルも粗方ライガ達を倒した為、ルーク達の助太刀に行こうとした直前だった為 直ぐに確認する事が出来た。

「ロックブレイク！！」

そう声の主が叫ぶと、ライガ・クイーンの足元が一気に変化！

石の槍となり、襲い掛かった。

「ジェイド！」

アルが駆け寄る。

「今は話しは後にしましょう。あの時と似たような状況でしょう?」

ジェイドがそう言うと、アルも頷いた。

「だね。・・・けりをつけよう。」

ジェイドが詠唱に入る。

「「天光を満ところに我はあり・・・黄泉の門・・・開くところ
に汝あり・・・いでよ!神の雷!!」」

アルもジェイドと同時に詠唱に入っていた。

(ふっ やはりこれも使えますか・・・)

ジェイドは横目でアルを見るとうつすらと笑っていた。

「ティアさん!ルーク!そこをはなれる!!」

そう叫ぶと、ティアはルークを掴み離れるように促して、その場を離れた。

「よし!」「ええ!」

アルとジェイドが頷きあう。

「これで終わりです!」「最後!」

「「インディグネーション!!」」

ズガアアアアアアアアアアアアアアアアアアン バリバリバリバリ・・・・

特大の雷が2本合わさり更に強大となりライガ・クイーンに降り注いだ！

グ・・・・グオ・・・・オオ・・・・

ズズン・・・・

ライガ・クイーンはゆっくりと倒れ、動かなくなった。

・・・・
・・・・

ルークはそのままその場に座り込んだ。

割れた卵やライガたちの骸を見ながら・・・

「なんか・・・後味悪いな。」

そう呟いた。

それを横で聞いていたティアは、

「・・・優しいのね、それとも甘いのかしら」

切なそうな寂しそうな・・・そんな表情だった。

だが今のルークにとっては・・・

「・・・冷血女・・・！」

そう思うしかなかったのだ。

「ルーク・・・仕方ないさ。やらなきゃこっちがやられていたんだ。割り切れないのは良く分かる・・・」

アルもそばに来てそう言う。

「ふん・・・」

ルークはただ黙っていた。

「ジェイド・・・すみません勝手なことをしてしまいました。」

3人からちよつとはなれた場所ではイオンがジェイドに謝罪をしていた。

「貴方らしくもありませんね、イオン様」

「チーグルは始祖ユリアとともにローレイ教団の礎です。彼らの

不悉はボクが責任を負わないと・・・」

・・・イオンはそう言った。

ジェイドはイオンの状態に直ぐ気がついていて、

「・・・そのために能力を使いましたね？医者から止められていたでしょう？しかも民間人を巻き込んで・・・」

「すみません・・・」

イオンは再び謝罪をする。

すると、戻ってきたルークが、

「おいオッサン 謝ってんだろそいつ、ネチネチ言っただねえで許してやれよ。」

そう言っただけでいった・・・

「おやおや、意外ですね 街で貴方を見ましたが・・・ こういう性格だったのですかね？てつきり愚痴ると思っていたのですが。」

「ルークはイオンの事が好きなんじゃないかな？」

側に来たあるがそう言う。

「え？」

イオンはきょとんとしていた。

「俺もそうだったけど、何にもわからない状態で・・・自分すら何者か分らないような状態で・・・そんな時、自分に構ってくれたり、頼りにされたりしていると・・・自分の存在を肯定してくれえているかのような感じがするんだ。そう言う風に接していただろ？イオンはルークに。」

そう言うのと、イオンは笑っていた。

「彼は優しい性格なんですよ。それを表に出すやり方がわからないだけで。」

「ふふふ。」

アルも笑っていた。

「いやはや、こうやって聞いていると アル、貴方が記憶喪失だなんて信じられませんよ。嘘なんじゃないですか？」

苦笑しながらそう言うのはジェイド。

「・・・そうだったらいいんだけどね。」

苦笑でアルも返す。

この表情を見ただけでアルは真実を言っていると容易に信じられる事が出来る。

目が凄く澄んでいるのだ・・・

嘘をつくような目には見えない、

イオンはそう感じていた。

「ってなわけでき、イオン！ルークのところにいつてあげてくれないかな？結構ショックがあると思うんだ。」

「そうですね。分かりました、」

イオンはルークの方へ行くと、先ほど庇ってくれた事のお礼ともう少し付き合っただけいいことを伝えた。

ルークはやはり少しショックだったのか元気が無い返事を返した。

そして一行はチーグルの長老へ報告をするために住処へと戻っていた。

#21 チーゲルの森・決着（後書き）

ありがとうございました！

#22 タルタロスへ強制連行（前書き）

よろしく願いします！

ですよ〜

いきなりこんな超強力キャラが仲間になんかなるわけ無いですよね・

・ ・ 苦笑

では！！

#22 タルタロスへ強制連行

【チーグルの住処】

「話しはミュウから聞いた　ずいぶん危険な目に遭われたようだな・
・ 2000年をへて・ ・　なお約束を果たしてくれた事　感
謝している。」

長老は一族を代表して頭を下げる。

「いいえ・ ・ ・！チーグルに助力する事はユリアの遺言ですから。」

イオンは笑顔だった。

「しかし・ ・ ・もとはミュウがライガの住処を燃やしてしまったこ
とが原因・ ・ ・ミュウには償いをしてもらわねばならん！」

「みゆう・ ・ ・ ・」

ミュウはしょぼん・ ・ ・っとしていた。

しかし次の長老の言葉で！

「したがって――　ミュウの処遇はルーク殿にお任せする！」

一気に元気になる！

ルークは。

「はあ!？」

何言ってんのお前? 的な表情で長老を見ていた。

「聞けばミュウはルーク殿に命を救われたとか・・・ 季節が一巡りするまでの間ミュウはルーク殿にお仕えする」

そう言い終わるとミュウがルークに飛びついた。

「みゅみゅみゅー」みゅみゅーみゅーみゅー

「だー! 頭に乗るな! オ・・・オレはペットなんかいらねーっての・・・!」

楽しそうに騒いでいる。

「連れて行ってあげれば?」

「そうだよルーク。チーグルって聖獣って言われているから、家の人もびつくりするんじゃないかな?」

「その通りですね。きっとご自宅では可愛がられますよ!」

みんなは賛成派のようだ。

ミュウは目を輝かせながらルークを見つめていた。

「う……うーん　なら　ガイたちへの土産ってことにでもすつか
ア……」

結局折れたのはルーク。

こうしてミュウはルークのペットとなりました♪

「報告はすんだようですね。行きますか」

そこへやってきたのはジェイド、

皆ジェイドのほうへついていった。

ルークは不満そうだったけど……　苦笑

暫く　歩いて、森の入り口に差し掛かった時。

「イオン様！！アル……！！大佐……！！」

声が森の入り口の方から聞えてきた。

「お？あの子お前の護衛役じゃないか？」

「はい　アニスです。」

「あ、ほんとだ。　護衛役なのに離れちゃまずいって思っるのは俺だ
けかな？」

そう苦笑すると・・・

「イオン様は気がついたらどっかいったっちゃうんですー！ー！ー！」

反論！！

って・・・

「聞えてたの・・・？」

「もつちろーん！！もう！！アルってば！！私そんなに無能じゃないわよ！」

ご立腹のようだ。

だけど・・・

「改めて・・・お帰りなさい？」

すーぐに元に戻る。

相変わらずだなあ・・・ 苦笑

おまけに地獄耳・・・

「ご苦労様でした アニス タルタロスは？」

「ちゃんと森の前に来てますよう！大佐が大急ぎでって言うから特急で頑張っちゃいましたあ！」

そう言うで一気に軍隊がやってきて、ルークとティアを包囲していた。

「——え？何だこれ！！どーなんてんだよ??」

「さ・・・さあ・・・俺は聞かされてなかったからなんとも・・・
ってか俺もかな？」

ルークは騒ぎ出し、流石にアルも予想外だったのかちょっと動揺していた。

「いえ セブンスフォーム アル貴方は関係ありませんよ。彼らは・・・正体不明の第七音素を放出していた疑いがあるのです。・・・よってあなた方を拘束します。」

そう言う軍隊のメンバーが取り押さえに入った。

「ジェイド！？ 2人に乱暴な事は・・・」

「そ、そーだよ！ルーク達はイオンを助けてくれた人たちだ。そんな・・・」

「2人とも落ち着いて・・・何も殺そうというわけじゃありませんよ。・・・2人が抵抗しなければ出すけどね。」

そう言う・・・

軍隊のメンバーに。

「連行せよ！」

一言命令。

そのまま戦艦タルタロスへ強制連行となった。

【タルタロス内部】

「2日前に起きた第七音素^{セブンスフォーム}の超振動はキムラスカ王国王と方面から発生 マルクト帝国領土タタル溪谷付近にて収束・・・ 長振動を起こしたのが貴方達ならば、不正に国境を越え マルクト帝国領内に侵入したことになりますね・・・」

ジェイドによる尋問が始まっていた。

ティアは元々身分はイオンが分かっていた為すんなり素性は分かっていたが・・・

問題はルークだった。

「ティアが神託^{オラクル}の盾騎士団の人間だということはわかりました ではルーク。 貴方のフルネームは？」

少し間を空けて・・・ルークは話した。

「——ルーク・フォン・ファブレ お前らが誘拐に失敗したルーク様だよ」

！！

「ファブレってたしか……」

これは……覚えてる…… 世界情勢でかかれてた……な……

「ふっ 貴方の勉強熱心振りには本当に驚かされますね。そう キムラスカ王室と姻戚関係にあるファブレ公爵のご子息ってことですね。」

そう言うところアルは納得し、アニスは目を輝かせた！

「公爵！？ステキ？」

「ルーク……」

イオンとアルは心配そうな表情で見ていた。

「……敵国の王室関係と神託オラクルの盾騎士団の人間が共謀しての不正入国…… いよいよただの物見遊山とは思えませんね……それに誘拐とは？穏やかではありませんが……」

ジェイドは問い詰めるようにそう言うと、ティアが。

「ジェイド大佐！今回の件は偶然発生した超振動で私たち2人が飛ばされてきてしまっただけです！ファブレ公爵家のマルクトへの敵対行動ではありません もちろん神託オラクルの盾騎士団も無関係です！」

ティアが訴えた。

（・・・あの冷静なティアさんがこんなに・・・ひょっとして超振動ってやつのかつけを彼女が・・・？）

アルは考え込んでいた。

「ジェイド・・・ティアのいうとおりでしょう、彼らにそのような類の敵意は感じられません。」

イオンが助長する。

「賛成、そもそも敵国に単身（2人）乗り込んでくるなんて・・・ちよつと考えにくいし、隠密行動の目的なら、エンゲープで泥棒するの・・・ちよつと異常だと・・・メチャクチャ目だつてたし・・・」

アルもイオンに賛成。

「だー！アレは俺じゃねーっのー！！」

「はぁ・・・店先の食べ物勝手に食べたでしょ？」

ティアが暴れるルークを落ち着かせ・・・っというか一言くぎさした。

このやり取りを見ていたジェイドは・・・

ため息を零し・・・

「・・・まあ　そうでしょうね。とくにご子息の方は温室育ちで世界情勢には疎いようですし？」

「悪かったな！大きなお世話だ！！」

・・・ジエイドも火に油を注ぐのが好きなようだね・・・

アニスはアニスでまだ悶えてるし・・・ 苦笑

すると今度はイオンが・・・

「ここはむしろルークたちに協力をお願いしませんか？皆さんご存知のように昨今・・・局地的な小競り合いが頻発しています。ホド戦争が休戦してからまだたったの15年 このままでは再び本格的な全面戦争へと発展するのも時間の問題です。そこでマルクと王国ピオニー九世閣下は和平条約を提案した親書を送る事にしました。僕はローレライ教団最高指導者という中立の立場から協力を要請されました。我々は今和平の支社として戦争を止めるためにキムラスカ王国へ向かっています。」

「戦争を・・・止める・・・ てかそんなにヤバかったのか？キムラスカとマルクトって・・・」

ルークも啞然としていた。

世界情勢を全く知らないのであれば仕方無いことだろう。

「とはいえ・・・我々は敵国の使者です。すんなり国境を越えられるとは思えません」

イオンがそう言うと、変わってジエイドが繋げた。

「・・・そこで1つお願いがあります。ルーク、貴方ちからの力・・・いえその地位は今の我々にとって非常に好都合その権力をお貸しいただきたい」

いや・・・その頼み方はちょっと・・・

アルは若干引いていた。

（高圧的だね・・・敵国だから仕方ないといったら仕方ないんだけど・・・ルークにそんなのいつたら・・・）

「・・・おいおいおっさん その言い方はねーだろ！大体人にモノを頼む時は頭下げんのが礼儀じゃねーの？」

ルークは立ち上がり言い放つ、思ったとおりに・・・

「ルークよしなさい！あなただって戦争が起こるのはいやでしょう！」

ティアが宥めようとするが・・・止まらない。

（このままじゃ・・・アクセリユスが・・・）

「ルーク。」

アルが話しだした。

「んだよ！」

「俺からも・・・頼んじゃダメ・・・かな？このマルクトには・・・

俺の命の恩人が・・・ 恩人の町があるんだ・・・そこは今大変な事態に落ちている・・・君の助けが必要なんだ・・・」

顔を俯かせながら・・・続ける・・・

「助けてくれ・・・お願いします・・・」

そう言って頭を下げた。

「・・・ッ」

ルークも突然の事に困惑しているようだ。

「アル・・・」

イオンもアルを見つめていた。

ジェイドはまたため息を出し。

「アルに先を越されましたね・・・」

ジェイドも跪いた。

「どうかお力をお貸しください・・・ ルーク様」

回りも流石にジェイドの行動には驚いたようだ。

アルの時以上にざわついていた。

「・・・わかったよ。国王に取りなおせばいいんだろ？」

ルークは頭を掻きながらそう言う。

ジェイドはそれを確認するとスクツッと立ち上がり。

「助かります！そうと決まれば急ぎましょう！」

「・・・いい性格してんなアンタ・・・」

ルークは不満顔だった。

「ルーク。ありがとう」

そこへアルがやってきた。

「べっ・・・別になんでもねーよ！んなこと！！」

あからさまに照れてはいた 苦笑

（アルにも色々あったのね・・・）

ティアはその2人を眺めながらそう思っていた。

「さあ ぐずぐずはしてられませんよ。大詠師派の邪魔が入りかねません。」

ジェイドがそう言うと、

「大詠師派って？」

ルークが首をかしげた。

そしてアルのほうを見るが・・・

「ごめん・・・ちょっとまだ勉強不足だったみたいで・・・」

つと頭を掻きながら苦笑していた。

「ボクから説明します。お恥ずかしい話ですが ローレイ教団では派閥抗争が起きているんです。ボク 導師イオンを中心とする改革的な導師派 そして大詠師派モースを中心とする保守的な大詠師派・・・ ボクはマルクト軍の力を借りてモースの軟禁から逃げ出してきました。モースは戦争が起こるのを望んでいるんです！！ ヴァンがボクを探しているというのも恐らくはモースの指示・・・」

「何かの間違いです！導師イオン！！」

ティアが血相を変え、叫んだ。

「モース様は予言の成就だけを祈っておられます。戦争を望んでいるはずが！！」

（なるほど・・・ 大体分かってきたけど・・・）

「ティアさんはそのモースって人派なんだね。」

そこまでかばうということはそれほど信頼しているということだろう。

そう言つとアニスが。

「えー ショックですうゝ・・・」

じとーつとティアを見ていた。苦笑

「い いえっ 私は中立よ！^{スコア}予言は大切だけどイオン様の意向も・・・」

「おーい、さっぱり話が見えねーんだけどー」

ルークだけ取り残されたって感じた。

「えつとね 簡単に言つと・・・ イオンともう1人のお偉いさんがいて・・・ どっちが上かで揉めてる。っというか ケンカしてて・・・ そしてティアさんはもう1人の方を信頼している・・・ って感じかな？」

簡潔すぎるだろ！つてつつこまれても気にしない！

「おーなるほど・・・」

うん 納得してくれたみたいだし良かった。

「だっ・・・ だから違つのよ！私は中立つて・・・」

ティアが慌てながらそう言つたいたその時！

《ビービービー！！！！》

突然ブザーが鳴り出した。

#22 タルタロスへ強制連行（後書き）

ありがとうございました！

アルさん・・・勉強熱心ってレベルじゃないですね・・・
ちなみに作者ことじーくは社会と言う科目・・・だーいつきらいな
んで・・・
覚えられません！

テスト前に丸暗記して終わったら頭から抜けます！・・・はあ・・・

アルさんの頭脳が欲しいよー 苦笑

#23 強襲・神託の盾騎士団（前書き）

よろしくお願いします!!

黒くてでっかい人が出てきます!

あいつのせいでジェイドのレベルがぐって思ってたりました!
苦笑

では!

#23 強襲・神託の盾騎士団

とてつもなく大きな音だ！

意味が判って無くても嫌な予感しかない！

「^{ブリッジ}艦橋どうしたー！」

伝声管を使いジェイドが連絡を取る。

《師団長ー！敵襲です！ 前方上空にグリフィンの大集団ですー！
総数は・・・総数は不明ー！ 全体連絡ー！総員！第一戦闘配備に
つけ！繰り返すー！総員！第一戦闘配備につけー！》

グ オ オ オ オ オ オ オ ー！！！！！！

上空全てを覆い尽くすかのような数の魔物が押し寄せてきた！

《グリフィンから 多数のライガが降下ー！応戦間に合いませんー！
！ 船体に張り付き攻撃を・・・？ドガアアアン？ ぐわあッ
！！》

その連絡が艦橋ブリッジとの最後の通話だった・・・

戦艦が一気に揺れる！

「きゃー！ー！ルーク様 アニスこわーい？」

揺れを利用したハゲ！！

「うわわ！？」

ルークは揺れに戸惑っていてそれどころではなかった。 苦笑

「魔物たちが連携行動を・・・！？どういうこと！？」

「艦橋！ブリッジ！艦橋！ブリッジ！」

ジェイドが連絡を取ろうとするが返事が帰ってくる事は無かった。

暫く 揺れと、怒号が続いていたが・・・

「と・・・止まった・・・！？ イオン様 大丈夫ですか？」

ティアが膝をついているイオンに手を差し伸べる。

「はい、ボクは大丈夫です。」

「何とか・・・とりあえずは止まったね・・・ まだ安心は出来ないけど・・・」

そう言つと・・・

「じょー 冗談じゃねえ！こんなアブネー陸艦^{ふね}俺は降りる！！」

ルークは直ぐに立ち上がると、ドアに向かって駆け出した！

「ルーク！！外には敵がいるかもしれない！今は・・・」

つて言い終える前にルークは飛び出してしまった。

その時！！

「そのとおりだ！」

ドガアッ！！

通路で待ち伏せしていたのか・・・大男がいた。

強大な鎌のような武器がルークの首近くまで振り下ろされ壁に突き刺さる。

「迂闊に動くなよ この坊主の首が飛ぶぞ？ さあ 大人しく導師イオンを渡してもらおうか」

男の名は・・・

オラクル
神託の盾騎士団 六神将 黒獅子ラルゴ

通路で全員集まったが、ルークを人質に取られている以上 迂闊には動けないようだった。

「戦乱のたび骸を漁るお前の噂・・・ 世界にあまねく轟いているようだな 死霊使い^{ネクロマンサー}ジエイド。」

「—— 貴方ほどではありませんよ。神託の盾騎士団^{オラクル} 六神将 黒獅子ラルゴ・・・あなた1人で私を倒せるとでも？」

一触即発の状態だ・・・

と言うかルークを忘れている物言いだな、ジエイド・・・

（死霊使い^{ネクロマンサー}？まさか・・・）

ティアは死霊使い^{ネクロマンサー}の名に驚いているようだ。

でも・・・ それどころではない。

ルークを助ける事が先決だ。そしてイオンも・・・

アルはティアの後ろで・・・

（ティアさん・・・暫く動かないで・・・オレをそのまま隠してて！）

控えていた。

そして 術式を見えない死角の位置に刻む・・・

「！？（わかったわ・・・）」

一瞬ティアは驚いていたが、振り向かず直ぐに理解してその場で身構えた。

これにより完全にラルゴからはアルが見えなくなる。

「ふん・・・確かに死霊使いネクロマンサー殿を相手にするのは聊か骨が折れそうだが、これを使えば別だ。ふん！」

「！！！」

そう言う小さな箱のようなものを投げつけた。

その箱はジェイドの真上で分解すると・・・

バリバリバリ！！！！

まるで雷のようなものがジェイドに降り注いだ！

アンチフォンスロット
「封印術！！！」

ティアが叫ぶ！

「し！しまった！！」

ジェイドはその場に疼くってしまった。

「これは本来導師の譜術を封じる予定の物だったがまあいい！……これで貴様は譜術が使えぬ！！」

そう言い！一気にジェイドに攻め寄った！

「くっ！！！」

ジェイドは槍を出し撃退の体制をとる。

「アニス！！イオン様を！！」

アニスは返事をする前にイオンを引連れて走り出す！

「させぬ！！！」

ラルゴは鎌を構えなおした！

「ジェイド！！そいつから離れる！！！！」

「！？」

「何！」

「！！！」

後ろからアルの声が聞えた為、ジェイドは接近し攻撃せず ルークを連れはなれた。

「・・・足元注意だ！！ 唸れ！吼えろ！沈黙を破りし 神成る雷！
シャイニング・レイ！！」

カツ！！

急にラルゴの足元が光りだす！

「バカな！いつの間に！」

その次の瞬間！足元から頭上まで雷撃が迸る！

バリバリバリ！！！！ズガガガガ！！！！

「がはあッ！！！！おっ おのれええ！！！！」

！！

「つつ・・・！普通アレを直撃したら気絶するんだけどな！！」

ラルゴは気絶するどころか立っていた。

「いえ！でもチャンスです！！！」

ドスンッ！！

ジェイドの槍がラルゴの体を貫いた・・・

「！！！！刺ッ」

その場面^{シーン}を目の前で見てしまったルークは一瞬気を失うような感覚に襲われてしまっていた・・・

ジェイドは体を抑えながら、槍を消した。

「大佐！おケガは？」

ティアも駆けつける。

「大丈夫です。助かりましたよアル。」

そう言うつと槍を何処かへとしまい、こちらを向いた。

「どういたしまして・・・とりあえず 何とかなったね。」

アルはそのままジェイドのほうに手を上げた。

「このまま^{ブリッジ}艦橋を奪還しましょう。イオン様はアニスが無事合流先へ逃がしてくれたはずです。」

「大丈夫なの？さっきのアンチ・・・何とかってやつは？」

アルがそう言う・・・

「大丈夫・・・つと言えればいいんですが、封印術を完全に解くには数ヶ月かかってしまいます。ですがティアの譜歌　ルークの剣術、そしてアルの譜術があればタルタロスの奪還は十分可能です。・・・協力していただけますか？」

「俺は勿論。早く親書を渡して欲しいし、イオンやアニスも心配だからね。」

「私もです。行きましょう　ルーク」

「・・・あ　ああ・・・」

ルークはとりあえずは返事をしていたが・・・頭の中は先ほどの突き刺す場面から離れなかった。

（人を・・・刺した・・・）

・・・
・・・
・・・

#23 強襲・神託の盾騎士団（後書き）

ありがとうございました！

#24 六神将・鮮血のアッシュ（前書き）

そっくりさんが出てきます！ルーク達は見れてないけど、ジエイド達はばっちり見れてるからこれがファースト・コンタクトですね♪

よろしく願いします！！

#24 六神将・鮮血のアッシュ

「……」

ティアの譜歌で艦橋付近にいた兵士は全て眠りにつき、無力化していった為比較的簡単に目的地へと到着していた。

「ティアさんすごいですの！！キレイですの！」

「そうだね。……綺麗な歌声だね。」

アルは目を瞑り歌を聞き入っていた。

思ったことをそのまま伝えただけなのにティアは焦っていた。というか照れて？

「もう！2人とも何を言ってるの……」

「いや……戦闘中も聞いていたけどやっぱり綺麗な声だっと思ったから。」

「みゅうみゅう」

ミュウも同様だった。

ルークにうるせえ！って言われてたけど・・・苦笑

とりあえずティアは必死に照れ隠してました♪

「さて、^{ブリッジ}艦橋を取り戻します。ティアは私を手伝ってください。アルは後衛を・・・出入り口の確保をお願いします。」

そう言つと、ティアと共に中へ。

つて・・・

「俺は？」

ルーク忘れてるよ？

「ルークはアルと一緒にそこで見張りをお願いします！」

そう言い今度こそ中へ。

「んだよ・・・俺の剣術は見張りくらいにしか役にたたねーってことか？ 頼るよーな事言つといて」

ルークは不満だった用だ。

「まーまー 出入り口を確保するのも重要なことだしさ！」

いつもどおりアルがフォローを！

こんな感じですね　変わってないな・・・

「そーいや・・・お前・・・俺と同じで記憶喪失なのに・・・あーいうこと見て・・・なんとも思わないの・・・か？」

最後の方の声が小さくなっていく・・・

（そうか・・・そうだよな、ルークは公爵の息子って言うてたし・・・俺はアクゼリユスの件があったから・・・）

「さっきの事・・・だね。」

ルークは返事をせずただ顔を背けた。

「俺は・・・俺の恩人の住んでいる町がモンスターに襲われた時にちよつとあつてな・・・幸い死者は出てなかったけど・・・重傷者は何人も出てたから、それであまり動じなくなったのかもしれないかな？・・・でも俺も人が人を刺すところなんて見たのは初めてだよ。ルーク。」

「ならなんで　平気な顔してんだよ！アルといいティアといい！！」

ルークは続けた。

「人を・・・刺したんだぞ・・・　魔物じゃない・・・　人なんだ・・・」

「・・・　彼らだって・・・好きで人を殺しているわけじゃないと思う・・・　そうしないと　これからもつと人の命が失われるんだから・・・　俺は目の前で見た。ただ・・・鉾山で仕事をしてい

るだけの人たちを・・・蹂躪するかのよう襲う魔物たちを・・・アレだって、人と魔物の戦争みたいなものだ。・・・戦争が起これば 人が人を殺す、もつと悪化すれば・・・戦士じゃない平和に暮らしていた街が戦場になるかもしれない・・・んだ。」

そう・・・それは国境付近の町 アクゼリウスでも起こりえる・・・寧ろ国境だからこそ その可能性は大だろう。

「俺は・・・そんなのは嫌なんだ・・・」

アルは俯いていた。

「・・・」

ルークもただ黙つてあるの話を聞いていた。

そんな時・・・

「う・・・うう・・・」

声が聞えてきた。

消え入りそうな・・・呻き声が聞えてきた・・・

「！！向こうだ！」

アルがいち早く気付き、駆け出す。

「おい待てよ！！」

ルークも同様に走りだした。

少しはなれたところに……1人の兵士が倒れていた、

兵装から見ると……この軍の兵士だろう。

全身に満遍なく裂傷、貫通…… 見ているだけで激痛が走りそうな状態だった。

「ツツ！！ だっ 大丈夫か！？」

僅かだが……息はある。

「しっかりしろ！ ファースト・エイド。」

治癒の譜術を使用した。

この人の傷ははっきり言って重症を通り越して致命傷に近い……

より高度な治癒術を掛ける為の詠唱時間ですら惜しいほどに……

ルークはそんなアルを見ていて、

「お前……そんなことも出来るのか。」

と驚いていた。

「ああ、攻撃の譜術よりは苦手なんだけど、無いよりはマシだしね。そうだ！ルークは入り口のところへ戻っててくれ。」

「んあ？」

「この人・・・傷が酷い。ティアさんが戻ってきたら呼んでほしいんだ彼女の力もいるから！」

そう言うのと再び怪我人の治療に当たった。

「お・・・おお！分かった。」

そう言うのとルークは元の持ち場へと戻っていった。

「しっかりしろ・・・死ぬんじゃないぞ！」

僅かだが・・・息をしている・・・

そして・・・

「ぐっ・・・があ・・・」

意識が戻ってきた。

「！！ 大丈夫ですか！？」

「うぐ……す すまない……」

痛々しい姿だった、アルは意識が戻ったことに喜びをあらわにしていた。

「もうちよつとだ！がんばって！うおおお！！」っ！！！！」

突然の怒号に驚いて振り返ると、ルークが戦っていた！

「そんな……譜歌で眠っていたはずなのに！！」

拳に力が入る……

（まだ予断を許されない状態だ、このままこの人を見殺しに何てできるわけが……）

「おぬしは……アル……だな？ 俺に構うな……少年のところへ……行け！」

そんな時兵士から置いていけといわれた。

「馬鹿をいうな！ こんな状態なんだぞ？ たったアレだけの譜術で快復なんてしない！ 死んでしまっぞ！」

そう言うとその兵士は腕を掴んだ。

「あの……少年は…… 任務を遂行する上での……最も重要な人物だ！！ 失うわけには……いけない！！ 俺は兵士だ…… 任務の遂行が第一…… そして覚悟なら既に出来ている！ 行ってくれ！頼む！」

掴まれている腕から痛いほど感じてくる。

不甲斐無い自分に構わず行ってくれと。

そしてそれを無視すればそれこそこの兵士の覚悟に対する侮辱なのだろうと・・・

ならば・・・取れる行動は1つしかなかった・・・

「・・・・・・・・ッ！ 直ぐに戻る！！頼むから持ちこたえてくれ！！」

「・・・・・・・・ああ、行ってくれ。」

仮面をかぶっていて分からなかったが、表情は笑っているように見えた。

そしてアルはルークの元へと急いだ。

「死ねエエエエエエ！！！！」

神託オラクルの盾兵がルークを切り裂こうとした！

「あ・・・死・・・あ！！く・・・くるなア！！！！」

ルークは無我夢中で剣を突き出す！

そして・・・

ドスン・・・

「が・・・はぁ・・・」

腹部に突き刺さり・・・壊れた人形のように倒れ・・・動かなくな
った。

「ひっ・・・う・・・うわあああああ！」

倒れ逝く兵士を見てルークは狂いそうになる・・・

「さ 刺した・・・人を・・・俺が・・・俺が 殺し・・・」

その時！

ヒュッ！！

衝撃波のよなものがルークを襲う・・・

ドガアアア！！

「ぐあっ！！！」

「ご主人様！！！」

そして、その先を見ると・・・男が立っていた。剣を突き出して・

「人を殺すことが怖いなら剣なんて棄てちまいな！！この出来損ないが！！！」

そう吐き捨てた！

「ルーク！！！」

そこにアルも駆けつける！

「ああ！！誰だ！？テメエは！！！」

その男は明らかに不快感をあらわにした。

「それはこっちのセリフだ！」

ルークの前まで行き、庇うように身構える。

その時！

「ルーク！アル！！」「どうしました！！！」

2人が戻ってきた。

しかし、その声に一瞬だが気を緩めてしまい・・・

「隙ありだ！」

ドガア！！！！

「くっ！！」

「うわあ！！」

ルークとティアが攻撃を受けてしまった。

アルは何とか攻撃をかわしていた。

「クソ！ 来い！連激の焰！ フレア・ボム！！」

拳大の大きさの炎を出し連続で放つ！

ドガアアア！！

「ちっ！やるな・・・ お前！」

その炎を剣で切り落としアルを見なおした。

「早い・・・」

アルの詠唱は攻撃力の高いものほど詠唱時間がかかる、その為現時点で使える術で最速の攻撃を使ったのだが、威力不足のせいか、相手の服を少し焦がした程度で終わってしまっていた。

その上・・・

「う・・・これは・・・」「アッシュ様・・・」

眠りにっていた兵士達が次々と目を覚ましていった。

そしてルーク、ティアも戦闘不能の上、敵の方で倒れている・・・

「最悪な状況だ・・・」

「アッシュ—— 六神将 鮮血のアッシュ!!」

ジェイドがそう叫ぶ。

（ジェイドが無事でよかったのだが・・・ この状況を打破できるか・・・？あの男・・・かなりの使い手だ・・・ ?? だけどあの顔・・・ルークと・・・）

「さすがは死霊使いネクロマンサー殿・・・しぶとくていらっしゃる・・・」

笑いながらジェイドの方を見ていた。

そこへ攻撃を入れようと集中していたその時、

「アッシュ！そのへんにしておけ！ 閣下のご命令を忘れたか？」

もう1人・・・後ろから、いや頭上・・・上から現れた！

「リグレットか・・・？」

「く!!」

両腕に集中したその時!

ドン!! ガキン!!

「妙な真似はやめておけ小僧。」

銃弾が頬を掠めるようにして地面に激突した。

わざとそう狙ったのだろう、・・・かなりの腕のようだ・・・

「ちっ 捕らえてそいつらを閉じ込めておけ!」

ジャマされたのに腹が立ったのか アッシュはそのまま命令し、後ろを向いた。

「報告します! 導師イオンをタルタロス広報の森林地帯にて拘束しました!」

「アッシュ 私が行こう」

リグレットと呼ばれている女がそう言っていると、

「ああ・・・任せる。」

アッシュはそれだけ言い、離れていった。

そしてルーク・ティア・ジェイド・アルの4名は・・・拘束された。

そう・・・4名だけだった・・・

あの兵士は・・・息を引き取っていたらしい・・・

連行される前に、あっちにいる兵士も頼むと頼み込んだのだが・・・

隠れられていても厄介だと判断した兵士が確認に行ったところ・・・

もう冷たくなっていたそうだ・・・

・・・

・・・

・・・

#24 六神将・鮮血のアッシュ（後書き）

ありがとうございました・・・

助けられなかったみたいです・・・

どうしようもない襲撃だったから仕方ないかと・・・

原作では全滅って言ってましたし・・・

頑張れ！アルくん！

#25 作戦名 骸狩り（前書き）

よろしく願いします！

こちらも不定期ですが…ガンバリマス！

#25 作戦名 骸狩り

【タルタロス・船室】

「……………」

牢屋で暫く表情をくらめていた。

「仕方ありませんよ。アルどうしようもないことはあります。」

ジェイドはそう言う。

「そうだとっても……なかなか割り切れないものですね……
人の死は……」

「……しかし 私の部下を看取ってくれたことには礼を言います。
彼は最後まで任務を全うしたんですね。ありがとございます。ア
ル」

そう言っ頭を下げた。

「……いや、大した事は……」

そう言ってもらえただけでも……少し心が軽くなっていた。

「そうだ……塞ぎ込んでられないよ。ティアさんとルークを手当
てしないと……」

そう言うと、牢屋で寝かされている2人の方へ行き、治癒術を使う。

「・・・もうあなたが何をしても驚かないと決めていたのですが、
少しまた驚きましたね、第七音素^{セランスフォーム}まで使いこなしますか・・・」

関心を通り越してあきれているような・・・

「まあ・・・得体の知れない力だけど・・・ 便利だからね、皆を
治したりできるし。」

ティアの治癒をとりあえず終わらせる。

次はルークだ。

「それに・・・傷つける譜術だけじゃなく、誰かを救える力も持つ
てるってこと・・・それが何か嬉しくてね。 得体の知れないのが
玉に瑕だけど・・・」

苦笑する。

「やれやれ・・・貴方のようなタイプの人には初めて会いましたよ。
お人よしで・・・その上戦える力があり・・・」

しみじみ答える・・・

「・・・気のせいかな？何かかるーく馬鹿にされているような気がする
するんだけど？」

「はっはっはー！気のせいですよ。」

うん。笑って誤魔化したな・・・

「はぁ・・・俺もまあ貴方みたいなタイプの人に初めて会いましたよ・・・まあ数週間分の記憶しかないけど・・・」

互いに苦笑しあっていた。

そのうちに・・・

ティアが目を覚ました。

「ん・・・ここは・・・」

「おはよう。タルタロスの船室らしいよ。」

そう言うのと慌てて起きる。

「私どれだけ気絶したのかしら？」

「ほんの数十分かな？ねえジェイド？」

「はい。それくらいですね。」

ティアは不甲斐無さを謝罪してたけど・・・

あれ不意打ちだし・・・

「あの六神将って連中は明らかに周りの兵士達とは核が違う雰囲気というかオーラというか・・・大変な相手だってことは一目で分

かったから仕方が無いと思うよ?」

「そうですね。少なくとも六神将3人確認できましたし、あの程度で済んで良かったと考えてもいいと思いますよ。」

ジェイドもそう言う。

「・・・でも これからは気をつけるわ。」

律儀な性格だね・・・ 苦笑

「そういえば・・・雰囲気で勝手に言っちゃったけど、六神将って何なのかな?」

ティアはちよつとガクツとしていた。

ジェイドはそんなティアを見て笑っている。

「そういえば・・・貴方は記憶喪失だったわね・・・ 全然そんな気配させないから忘れかけていたわ。」

そして苦笑する。

「たははは・・・」

ルークに手を当てながら苦笑する。

その間、一通りの説明を聞きました!

結構・・・っと言うよりかなりまずい相手みたいだね・・・

あの程度で本当に良かったよ。

はい・・・ ティアが目を覚めてからずっとルークの治療に当たってるけど・・・

目を中々覚まさないんだよね・・・

傷は癒えているはずなんだけど・・・

「貴方も第七音素セブンスフォニムを使用できるのね・・・ あの戦闘といい やっぱり凄いわ。」

ルークを治療しているのに気付いたティアは改めてそう感じていたようだ。

「あ・・・あのー さっきもジェイドに言われたんだけど・・・ あんまり面向かってそう言うこと言わないで欲しいかな・・・？ 照れるから・・・」

そう言って笑っていた。

「ふふふ・・・」

ティアは笑っていた。

ルークの夢 side

《・・・ーク・・・ ルーク・・・》

声が聞える・・・

(・・・ああ・・・いつもの夢 俺・・・どうしたんだっけ・・・
？ 何か凄く怖い思いをしたんだ・・・ 目覚めたくない・・・)

再び声が響いてくる・・・

《我が声に答えよ！ルーク！》

(嫌だ・・・このまま・・・)

side out

「ルーク!!」

ティアが心配そうにルークの顔を覗き込む。

ルークが目を・・・覚ました。

「良かったよ、うなされてたし、治癒かけても効果なさそうだったから。」

そこへアルの顔も割り込む。

「ココ・・・は?」

「タルタロスの船室ですよ。・・・と言うより牢屋・・・ですね。」

我々は神託の盾騎士団の大詠師派に捕まっ たんですよ。」

ルークは・・・暫く考え込んでいた・・・

一通りジエイドが説明したところで本題へと入った。

「さて、ルークも目覚めたところですし、そろそろこんなところは脱出してイオン様を助けに行きますか」

さおうジエイドは告げた。

脱出方法があるのなら最初から言っ て欲しかったけどね・・・

派手に暴れてもいいと思うけど、この戦艦頑丈そうだし、何より一発で包囲されそうだから・・・

「この牢屋どうやって開けるんですか？それにイオン様の居場所も・・・」

ティアもアルと同じ感じだった。

「このタルタロスは私の戦艦ですよ？ご心配なく。」

「というか・・・もうちょっと早くに言っ て欲しかったけどね・・・」

「やれやれ・・・と 苦笑する。」

「はっはっはー！まだ全員目覚めていなかったですからねえ。」

そう言つて笑つていた。まあ　いつもの通りに・・・　苦笑

「先ほど彼らの会話を漏れ聞きましたがイオン様はタルタロスへ連れ戻されるようです。」

「そつか・・・いちいち歩いていくよりはこっちの方が遥かに効率がいいから・・・」

「ええ、そう言つことでしょう。ですからその時にイオン様を救出しましょう。」

ジェイドがそう言つた途端！

考え込んでいたルークが急に叫んだ。

「ま・・・までよー!!」

「どうしたの？ルーク？」

「そんなことしたらまた戦いになるぞ!？」

ルークが考えていた事はそれだ・・・

「・・・？それが？」

ティアは普通に返す。

「また人を殺しちまうかもしれないつつてんだよー!!」

そう・・・先ほどの戦いで奪ってしまった命の事・・・それが彼の

心に深く傷ついたようだ。

「・・・それも仕方ないわ。殺らなきゃ殺られるんだもの。」

ティアは再び普通に返した。

「な・・・！？何言っただよ！？人の命をなんだと思って・・・」

「

最後まで言う前に・・・

ティアとアルが近付いていた。ティアが言おう

「ルークの気持ちは俺は痛いほどわかる・・・つもりだ。ジエイドが刺した相手だって元は俺の譜術からなんだから・・・間接的にだけ。」

そう言う・・・ルークも少し黙った。

「前に言った事・・・覚えているかな？前って言うってもちよつと前だけ。俺は・・・戦争が起こるなんて嫌なんだ。街を・・・救えなくなる。でもそれは人殺しを助長しているわけじゃない・・・話し合いで決着がつくのならそれが一番だ・・・だけど、それぞれの信念を持って戦っている以上、それも無理なんだよな・・・だから今を精一杯戦う、って決めたんだよ、俺は。戦える力を持つてるのに使わないなんて意味ないから。」

そう言いが・・・やっぱりルークは納得してないようだ。

「お・・・お前は・・・直接殺してないから・・・そんな事が言え

るんだ！俺・・・俺は・・・」

やはり・・・殺してしまったことのショックは大きいようだ。

無理も無い事だろう・・・

アルも・・・どうなるか分らないと思っているから、

見かねたティアが一步前へ出た。

「ルーク！今私たちが何もしなければ戦争が始まる　そうしたら数え切れないくらいの人が死ぬ。それくらいは分かるでしょう？　そしてアルはそれが嫌だから・・・持てる力を使おうと前を向いている、そしてココは戦場　戦場に正義も悪も無い　生か死かそれだよ。」

もう一步近付く。

「普通に暮らしていても魔物や盗賊に襲われることもある。だから力の無い人々は傭兵を雇ったり身を寄せ合って辻馬車で移動する。戦う力を持っているなら子どもだって戦う事がある・・・そうしないと生きられないから。」

ルークは・・・まだ納得できない。

「し　仕方ねえだろ！？俺はずっと屋敷の中にいてガキの頃の記憶もねえんだ！だからそんなこと知らない！俺は好きでここに来たわけじゃない！！」

ティアは一瞬悲しそうな顔をする。

「ティアさん・・・仕方ないよ、俺・・・多分だけど、ルークみたいに こういう感覚になるのが普通じゃないんじゃないかなって思うんだ。」

ルークに何か更に言おうとしたティアを止めるように言う。

「え？」

「人を・・・手にかける・・・戦争・・・戦い・・・軍人ならともかく、普通の人なら・・・そんなの恐れるし、したくない頭では理解できるのに・・・割り切れている俺がおかしいんだよ。だからあまりルークをせめないでやってくれ。俺がその分戦うから。」

「・・・」

ルークもティアも黙り込んだ・・・

「ふむ・・・それがいいですね、ティアと私、そしてアル3人で行けるでしょう。」

ジェイドはそう言った。

「そう・・・ね。でもアルだけに負担をかけるわけにはいかないわ。こんなことになった責任は私にあるし、必ず家まで送り届ける・・・って決めているから。そのかわり足だけは引つ張らないで 戦う気が無いのなら貴方は足手まといになるから」

「・・・なた・・・戦わないとはいってない！人を 傷つけたく

ないだけだ・・・」

そう言う・・・

「今は同じことよ 大人しく後ろに隠れていて」

「無理しちゃダメだ。」

とりあえず足手まといと言う発言は逆撫でするだけだと思うけど、間違いなくその方が安全だから。

「な・・・なるべく戦わないようにしようって言うてるだけだ！俺だって死にたくねえし・・・」

そう言う・・・ティアは顔を背け。

「・・・私だって 好きで戦ってるわけじゃない・・・」

齒軋りをしながら答える。

「・・・」

その姿にルークは何も言えずにいた。

「・・・・・・・・・・で？結局戦うんですね？ルーク 戦力に数えますよ？」

「ルーク・・・・・・・・」

「おう！お・・・俺も！戦う！」

ルークはもう覚悟を決めたようだ。

「結構。現在このタルタロスには140名ほどの兵が乗船していますが 助けは期待できないと考えてください 今の我々^{こゝ}に出来る事は1つ イオン様を奪還しタルタロスから逃げる！」

そう言うのと牢屋の入り口付近まで歩いていった。

「でもどうやって……?」

ルークはジェイドに聞く。

「非常事態は想定済みですよ」

そう言うのと床の一部を蹴り上げ中から伝声管を取り出す。

「こつ言う時の為の伝声管です。」

そう言う……ジェイドは伝声管に向かって！

「死^{ネクロマンサー}霊使いの名によって命じる！ 作戦名「骸狩り」 始動せよ!!」

そう言う……戦艦が震えるかのような感覚に見舞われた。

#25 作戦名 骸狩り（後書き）

ありがとうございました！

#26 ティアの負傷とルークの理解者（前書き）

よろしく願います！

#26 ティアの負傷とルークの理解者

オラクル
神託の盾 s i d e

突然全ての機能が停止し、扉も全て閉じその上灯りまで落ちた。

「いったい・・・何が起きているの？」

ライガに乗っている少女がそう聞くが・・・

兵士達も分からない、

「わっ わかりません！何故か全ての機能が 停止してしまいました。」

コンピュータを操作するが・・・

復帰のめどが全く立たない・・・

「・・・うつ どうしよう・・・閉じ込められちゃった・・・」

俯き落ち込んでいた・・・

その時

グルルルル・・・

乗っているライガが、少女の方を見ながら唸る。

「・・・えっ？ 助けてくれるの？」

そう言うと、ライガがすつと立ち上がり・・・隔壁まで移動した。

side out

「一体何が??」

「タルタロスの非情停止機構を発動させました。左舷昇降機へ!! 非情停止するとあそこ以外は開かなくなります!!」

そう言うと、牢屋の扉を開け、飛び出した。

そして・・・

全ての扉をロックしたおかげもあってか、敵にも会わず・・・
外へ。

ここはタルタロスの外。

イオンを捕らえた神託オラクルの盾のメンバーが、タルタロスからの出迎えを待っていた。

「妙だな・・・静か過ぎる出迎えの兵もいないとは・・・タルタロス内部との連絡も途絶えたままか？」

そう部下の一人に聞く。

「はっ 申し訳ありませんリグレット様」

この女は・・・

六神将 魔弾のリグレット

「・・・・・・・・フッ」

リグレットは何かを感じ取ったのか薄く笑うと、

「いいだろう 非常昇降口を開け！」

そう言った、

そして昇降口を開けると・・・

何名か飛び出してくる者がいた!!

「ジェイド!! ルーク!! アル!!」

イオンが叫んだ。

「ふっ やはり来たな。」

そう言つとリグレットは部下を散開させた。

「おらああああ! やれえええ ブタザル!!」

ミュウをむんずつと掴むと・・・

「みゅうううううううううううううう!! ファイアー
————!!」

ドゴオオオオオオオオ!!

ミュウのソーサリーリングによる攻撃をした。

さすがミュウ使い? 苦笑

「あちちちい!!」「ぐわわわわわわ!!」

結構効果は抜群みたい、少なくとも怯ませることは出来ていた。

だが・・・銃使いには関係ない。

「ふん！」

リグレットが銃を構えたその時！

ガキイイイン！

ジェイドの槍がリグレットの銃を弾き飛ばした。

「さすが ジェイド・カーティス 譜術は封じたと聞いていたが――
筋縄ではいかないようだ。」

「！ どうやらラルゴは生きていたようですね」

封じられた事を知っているのは・・・仲間たちともう1人・・・あの黒獅子ラルゴしかない。

そう結論するのは難しくなかった。

「なあ？ ティア・グランツ！」

そう告げると・・・ティアが驚いていた。

「あ・・・貴女はリ・・・リグレット教官??」

動揺しているのが良く分かる・・・

その背後から巨大な影が・・・

あれは・・・

「いけない！！ティアさん！そこから離れる！！」

そう言ったその瞬間、巨大な影から攻撃が飛ぶ。

ドガガガアアア！！

コイツは・・・

「ライガ！？」

何故ここに・・・っと思っていたら、ライガの背に乗っている人物がいたのに気がついた。

「やっと出られた・・・」

乗っていたのは・・・

「女のコ？？」

そう・・・アニスと変わらないくらいの背格好の幼い少女だった。

「アリエッタ！」

「おっと・・・動くと危ないですよ？」

この少女は・・・

《六神将 妖獣のアリエッタ》

その少女は、

「この仔が隔壁を切り裂いてくれて何とかここまでこられたの・・・
イオン様・・・」

そう呟きながらじっとイオンを見つめていた。

「結構多いな・・・」

そう思いながらも・・・

「ここを突破しないと逃げられない！」

そう言い力を込めた。

倒した数は増えていつているのだが・・・

数が・・・多い。

アルはそれでも、気をぬかず・・・確実に倒していった。

「アイツ・・・只者じゃないな・・・」

リグレットはあの男を・・・見てそう呟いた。

「おや？彼に興味があるのですか？ 見かけによらず年下がタイプなんですね。」

ジェイドはいつもどおり軽口？ジョーク？的なことを言う。

・・・が まあさすがに六神将そう言ったことは全く通用しないよ
うだ。

「ふつ 何か秘密がありそうだ。」

ジェイドの言葉を一笑し、観察をしていた。

捕まっていると言っのに精神力が凄い・・・

そんな時・・・

「ルーク！！下がって！！あなたじゃ人は切れない！」

そんな声が聞えてきた。

「！！！！」

ルークが戦っているのが見える。

「危ない！今のルークじゃ！！」

ルークの方へいこうとするが・・・

「死ねエエ!!」

兵が数人、取り囲むように切りかかってきた。

「クソ!こいつら!!」

そう言うと、詠唱に入る!

「気をつける!こいつの譜術は強力だ!詠唱の隙を与えるな!!」

そう叫ぶと!

「オラアアア!!」

「死ねええええ!!」

間髪いれず、襲い掛かってくる。

「・・・詠唱を防ぐだけでオレを止めれると思ったたら大間違いだ!」

そう言うと、今度は指先で譜術の陣形を描く、

「何だ!!これは!!」

1人の兵が叫ぶ。

「熱いの一発いくぞ? 獄炎 イグニート・バースト!」

ボゴオオオオ!!!!!!

「ぐわあああ!!」「がはあああ!!」

炎の柱が何人かを上へと吹き飛ばす!

「!!」

リグレットもさすがに驚いていた。

「また驚きましたね・興味が尽きない、速攻譜術・・・コレほどですか。」

ジェイドも笑っていた。

嬉しい誤算だったのだろう、譜術を使用する際は詠唱が必要、そしてそれは強力な術ほどに時間がかかるもの、その常識を覆す威力・

「形勢はこちらに有りですね。早いとこ降伏をしてください。」

そうリグレットに告げる。

「ふっ・・・確かにあの男は大したものだが・・・こちらの男はそうでもないぞ?」

そう言つて見た先には

「ぐーがー!!」

明らかにいつもよりキレの悪い動きをしているルークがいた。

キレが悪い理由は明らかだ・・・

(殺す・・・？また人を・・・？)

そう・・・そのことが頭によぎる・・・

(嫌だ・・・嫌だ!!怖い・・・怖い!!)

そしてルークは致命的なミスをする!

目を・・・閉じてしまったのだ。

そのとき!!

ズバアアア!!!

「!!!!!!」

「・・・ばか・・・」

「ティアさん!!!!」

ティアが・・・ルークを庇い負傷してしまったのだ。

「ちっ!!」

ジェイドが槍を投げつけ敵を撃退したが・・・

その代償で強敵のリグレットを解放してしまったのだ。

その上、ライガ達も暴れている・・・

こちらは1名・・・戦闘不能・・・

「まずい!!!!」

急いで向かおうとしたが、敵が多い!

そして、リグレットが銃を構えなおしたその時!

ズバアア!!

頭上から誰かが降りてきてイオンを取り囲んでいた兵士をなぎ倒した。

「ガイ様 華麗に参上！」

・・・???

誰??

って思うのは不思議じゃない。

突然現れた民間人って訳じゃなさそうだけど・・・

その男はそのままイオンを保護し、

「うちの坊ちゃんルークを捜しにきてみりゃ なんの騒ぎだこりゃあ？
とりあえず・・・みんな返してもらっぜ」

そう言つとウインクをする。

それに気付いたリグレットは振り返ると・・・

「形勢・・・再び逆転ですね？」

ジェイドが隙を見てアリエッタを捕らえていた。

「そう言うことだね。」

そして、アルも戻ってきた。

向かってきた神託オラクルの盾の兵全てを倒し、戻ってきた。

「リグレット・・・ごめんなさい・・・」

アリエッタはそのまま・・・リグレットに謝っていた。

「・・・兵も 殺られたか・・・」

「ちょっと・・・人聞きの悪いことを・・・皆無事だよ。ちよいと眠ってもらって起きても数週間はあちこち痛くて動けないかもしれないけど。」

そう苦笑しながらアルは言った。

「まあ それはともかく 武器を棄ててタルタロスへ戻ってもらいましょうか」

そう言うと、リグレットは観念したのか

「・・・しかたない」

武器を棄て、そして残った部下はそれぞれ倒れている兵を連れて・・・タルタロスへ入っていった。

#26 ティアの負傷とルークを理解者（後書き）

ありがとうございました！

#27 合流地点へ(前書き)

よろしく願います!!

#27 合流地点へ

敵の全員をタルタロスへ。

それを確認し、昇降口を閉める。

「これで暫くは全ての昇降口が開きません」

ジェイドがそう言った。

「ってことは 暫くは安全ってことだね。」

「ええ」

そう言うと、ティアのほうへ向かう。

「ルーク！のいて！」

そう言うとティアに治癒術を施す。

「大丈夫なですか？ティアは！？」

イオンが心配そうに聞く。

「・・・大丈夫 腕をきられただけみたいだ。 気絶してるけど
直ぐに治るよ！ イオンは？怪我無い？」

ティアを治療しながら、イオンの方を向いた。

「僕は・・・大丈夫ですが・・・」

イオンの表情が暗くなる・・・

「どうかしましたか？イオン様？」

ジェイドが聞くと・・・

「追っ手を振り切ろうと逃げ込んだ森でアニスとはぐれてしまった
のです。 それで、アニスも親書も行方が・・・ 無事でいてくれ
ると言いのですが・・・」

イオンは心配そうに言った。

「彼女も優れた人形士です。^{バベッター}信じましょう。そしてアニスとはもし
もの時の合流地点を決めてあります。そこへ向かいながら体勢を整
えなおしましょう。」

ジェイドがそう言つと・・・

「そちらさんの乗組員たちは？まだ船の中にいるんじゃないのか？」

助けに来てくれた男がそう言う。

「・・・いえ 生き残りは期待できないと考えるのが妥当でし

よう。1人でも証人を残してはローレイ教団とマルクト帝国の間で紛争になりますから・・・」

・・・・・・・・・・

皆黙っていた。

「・・・行きましょう 僕たちがここで捕まってしまったらもっとたくさんの人が・・・戦争で亡くなるのですから・・・」

イオンがそう静かに口を開く…

皆それに納得しこの場を後にした・・・

タルタロスの昇降口を封鎖し、多少は時間が稼げているのだが、

早めに離れた方がいいのは間違いないため、一行は速度を上げ、移動をしていた。

そのせいか・・・

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・」

イオンは息切れをし・・・そして膝をついていた。

「ある程度は離れましたし、とりあえず・・・野営地で一休みしましょう。これ以上イオン様に負担をかけるわけにはいきませんし、そしてティアの怪我也気になります。」

開けた場所で、一行は暫く休憩する事にしていた。

「ふう・・・とりあえず追手は無いみたいだね・・・」

後方を確認してもとりあえずは一安心。

「ふう… すみません・・・」

イオンがそう言う。

「あんまり無茶できないし。何より、ティアさんが怪我してるからね。イオンが謝ることは無いと思うよ。」

アルが側まで来て話す。

「あ・・・ ありがとうございます。」

「さあ、ティアさんの治療を再開しようか・・・」

そして 今度はティアの側まで行き、治癒術を再開した。

「へえ・・・ あんたは第七音素譜術士だったのか。」
センフンスフォニマー

横で見ていた男がそう呟く。

「ははは・・・ そう みたいだね。ちょっと事情があるんだけど・・・」

苦笑しながら治療を続ける。

「へ？それってどういう？」

「まあ もう何回もいろんな人に話してるし、内緒って訳でもない、また 改めてちゃんと説明するさ。それより・・・君はいつたい何者なのかな？ 坊ちゃんって言ってたけど・・・ルークのことかな？」

そう言つと、

「そついや自己紹介がまだだったな、いましてもいいんだが・・・
詳しい事は彼女が目を覚ましてからにしよう。とりあえず 名前はガイだ。よろしくな。」

そう言いこちらを向いた。

「よろしくお願いします。」

「ガイ・・・ 来てくれたんだな・・・」

ルークは少し表情を暗くしながらもガイの登場には喜んでいた。

（色々あったから・・・仕方ないといったら仕方ないけど・・・とりあえず 知人が来てくれたことは好ましいな・・・）

「う・・・」

話をしているうちに・・・ティアが目を覚ました。

「ティアさん！良かったですよ！！」

ミュウが飛びつく。

「ミュウ・・・私は・・・」

ティアはまだ少し朦朧としていたが次第に意識がハッキリしているようだ。

「いやぁ よかったですね。 治療術が使用できるアルがいてくれて助かりましたよ。」

ジェイドがそう言う・・・

「なーんか 素直にそういわれると何か裏があるんじゃないかって思っちゃうんだけど?」

ジェイドをじーっと見る。

「おかしいですね? 思ったことをそのままいっただけなんです・・・?」

ジェイドはサラっとかわす。

「ありがとう・・・アル、もう大丈夫。 自分で治療も出来るし、」
そう言うとティア自身も怪我した箇所を手を当て、治療術を使用する。

「あ・・・あの・・・」

ルークが・・・ティアに話しかけた。

「あ！あなたは大丈夫なの？」

ティアが逆にルークの身を案じるように聞く。

「えっ？」

ルークは予想外の事に少し戸惑っていた。

「私は・・・あなたが民間人だってことを知っていたのに理解できていなかったみたいだわ・・・ごめんなさい・・・」

逆に怪我をしたティアが謝っていた。

「・・・なんで怪我したお前が誤るんだよ!？」

ルークがそう言う。

「私は軍人だもの民間人を守るのは義務・・・その為に負傷したのならそれは私が非力だったってことだから。」

傷跡を抑えながら・・・そう言う。

するとジェイドは・・・

「いやー お2人とも仲が良くて羨ましいですねー」

笑いながら？そう言った。

「んな！俺たちは別に！」「そんなんじやありません！」

.....

「ははは！息もピッタリだね。」

アルもつられて笑う。

「ちょっとアル！」

すると今度はミュウが、

「ティアさんもご主人様もお顔真つ赤ですよ！」

そう言うのもちろんルークが。

「うつせえー！」

まあ ミュウが一気に落ち込んだのは言うまでも無いだろう・・・
苦笑

「ははは！とりあえず ウチの坊ちゃんも元気になって、良かったよ。んじやあ 改めて自己紹介だ。」

「あーもー！！ガイまで！！！」

ルークはまだご立腹・・・ いや照れ隠しだね・・・ 苦笑

「おいおいルーク・・・ 自己紹介するって言うのに取ってんじやねえって・・・」

ガイも苦笑していた。

#27 合流地点へ（後書き）

ありがとうございましたあ！

#28 合流地点はカイツール（前書き）

よろしく願います！

#28 合流地点はカイツール

そして・・・

笑　も無事終わり・・・

こっちも自己紹介を。

「えーっと・・・ そうだね この中で知名度一番低い俺だし、俺もちやんと名乗らないと。俺はアルって言うんだ。よろしく！」

「ああ！こちらこそ！」

ガイと握手を交わす。

「私はティアよ。」

そう言ってティアも握手をしようとしたが……

「お
お
お
女……!」

ズザザザザザザザザザザ！！！！

つと凄い勢いで後ずさりをして離れた。

「????あれ?」

「何?」

ティアとアルは首を傾げていた。

「ああ・・・ガイは女嫌いなんだよ。」

ルークが補足してくれた。

「あ・・・なるほど、っと言うかあれじゃ・・・女嫌いというより・・・」

「女性恐怖症ですね。」

ジエイドとアルがもうちょっと症状が重そうだからそう付け加えた。

「私のことは女だっと思ってなくていいわ。」

更に一歩近付くとガイも一歩下がる・・・苦笑

「いつ いや!!--君がどーとか って訳じゃなくて そのっ!!--!」

やれやれ・・・

「っというか、ティアさん・・・女と思わなくていいって・・・それは無理でしょ?」

「何故かしら?」

きょんととしてティアはそう言った。

「何故ってそんなに美人なんだし、どうやって男って思うのさ？」
普通にさらっとそう返す。

「なっ 何を！！／／／／」

ティアは真っ赤になっていた。

「おやおや ナンパですか？アル、やりますねえ」

ジェイドはそう言ったが・・・

「????なんで? 思ったことそのまんま言っただけなんだけど・・・?
」

（おやおや こちらは素ですか・・・ これはまた貴重な性格をしますねえ・・・）

ジェイドは何も言わずただ苦笑をしていた。

?珍しいね 何も言わないなんて 苦笑

.....

（ルーク アルってあんな感じなのか？）

（い いや 初めてみた。でも お前もあんな感じなんだぞ？ガイ
女嫌いの癖に家のメイドたちの接し方とか・・・）

（ええ！マジで！！）

「そこ・・・何こそそ話してるのさ・・・」

ふう・・・つと息を吐きながら言う。

「ふふふ・・・」

イオンはただ笑っていた。

どうやらアルは そう言うことにはちょっと疎いようだ・・・

褒められたりしたら照れるって感情はあるのにねえ・・・

ティアは暫く顔が赤い状態のままだった・・・ 苦笑

まだ若干ティアは赤いし・・・ 周りもざわついていたけど・・・

とりあえずジエイドは早く先に進めたかったのか サラツとスルー
してみたいだ。

「ティアも大丈夫のようですし 早く出発した方がいいでしょう。」

「おいおい ルークさんよー モテモテじゃねーか！」

ガイが笑いながらそう言う。

「うるさいな！」

苦笑しか出ないね……

「はははは……メインのイオンをついでって…… なんと
言っかなあ……」

アルもまた……苦笑していた。

「まあー そこはアニスですし？」 「アニスですから！」

イオンとジェイドはなにやら納得してる……

「（アニスってのは一体どんなコ何だ……？ まあ とりあえず
……） んで、その第2地点って言うのはどこなんだ？」

ガイはアニスのことはひとまずおいといて…… 苦笑

先の話をした。

「それは国境線のあるカイツールの軍港のことですよ。」

ジェイドがそう地名だけ説明すると、ガイはもう場所が大体理解
できたようだ。

「つとすると・・・フーラス川を渡った先だな・・・」

・・・あれ？　ガイってルークの使用人・・・つまりキムラスカ人じゃないの？

ちよつと疑問に思つてると・・・　ジェイドも同じ感じなのか、

「おや・・・　ガイはキムラスカ人のわりに・・・マルクトに土地勘があるようですね・・・」

ちよつと疑いのまなざしが入ってないかなあ？ジェイドさん？
苦笑

「ん・・・？　あ　ああ卓上旅行が趣味なんだ、それに　カイツールまで行けばヴァン謡将に会えるぜ？ルーク！」

とりあえず・・・ガイはそう説明した。

まだジェイドの疑念は消えてはいないようだが・・・

でもルークは師匠と会えるのが嬉しいのか。

「^{せんせい}師匠と！？」

これまでに無いほどの歓喜の声をあげていた。

「兄さんが・・・」

ティアは逆に不安そうに・・・呟いた。

「ティアさん・・・」

その様子に、アルも心配だったのかつい声が出てしまっていた。

「私なら大丈夫よ。それと・・・前から思ってたけど、私にさんは
いらないわよ？アル、って言うより私だけさん付けのような気がする
けど？」

直ぐに表情を元に戻したティアがそう言った。

「あつ いや・・・ほら！なんとなく・・・かな？」

「そう、ならもうさんはいらさないから。歳は同じくらいでしょう？」

さん付けされるの嫌なのかな？まあいつか・・・

「わかったよ！ティア・・・」

やっぱりちょっと照れくさい・・・ 女性を呼び捨てにするのはね
え...

「おやおや、ルークだけではなく、アルもですか？ティア？」

ジェイドが再びニヤニヤ・・・

「ちょっと大佐！！」

「????」

ティアは再び慌て、アルは???を頭に浮かべていた。

「まあ・・・アルですから・・・大変ですよ？ティア」

「もう、そんなんじゃないですって!」

「なんだよそれ・・・ジェイド・・・」

アルは・・・ちょっと鈍感なんだね・・・褒められるとかは分かっても、他人の好意とかは・・・

でも ティアが好意を持っているかどうかはまだ微妙だと思うけど。

「ははは！楽しそうなところなんだけど、そろそろ本当に行こうぜ。カイツールに向かってさ。」

ガイがそう言うと、皆とりあえず収まった。

長かったなあ・・・

#28 合流地点はカイツール（後書き）

ありがとうございました！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7030u/>

Tales Of The Abyss ~ Another story ~

2011年12月4日16時56分発行